

蓮如上人

梅原真隆著

666
240

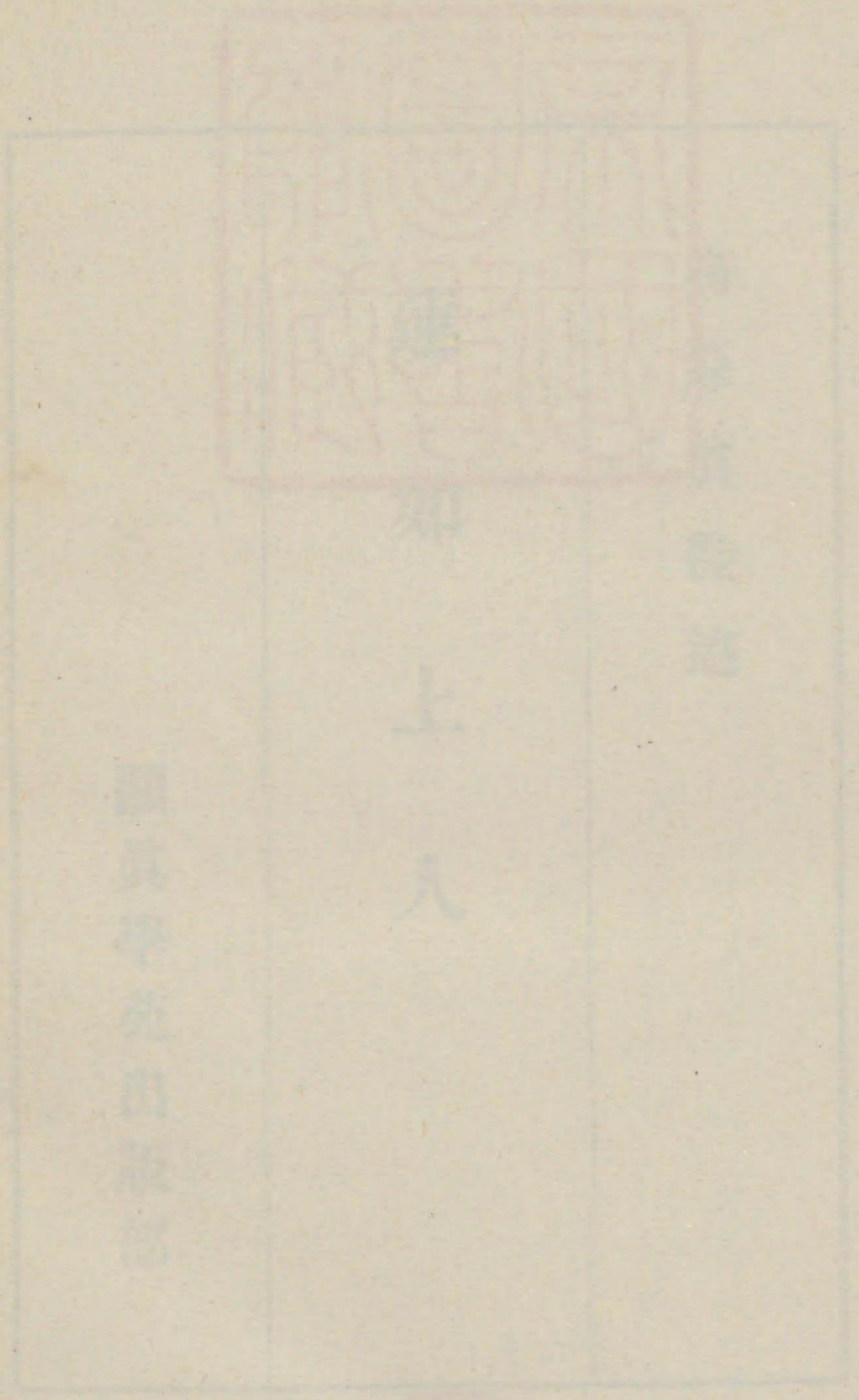
666-240

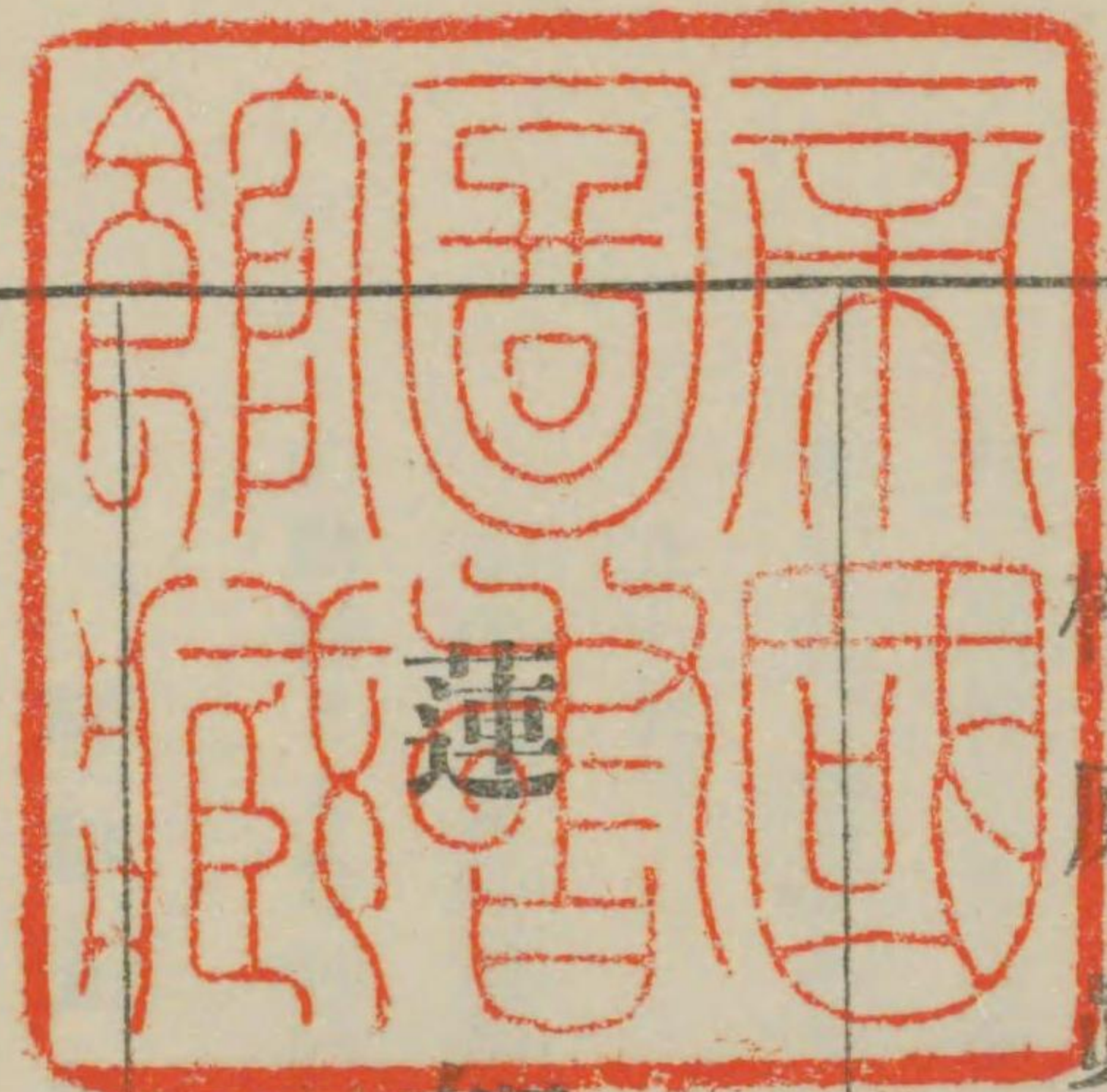
1200501574119



蓮如上人

梅原眞隆述





梅原真隆述

如
上
人

顯真學苑出版部



666-24

自序

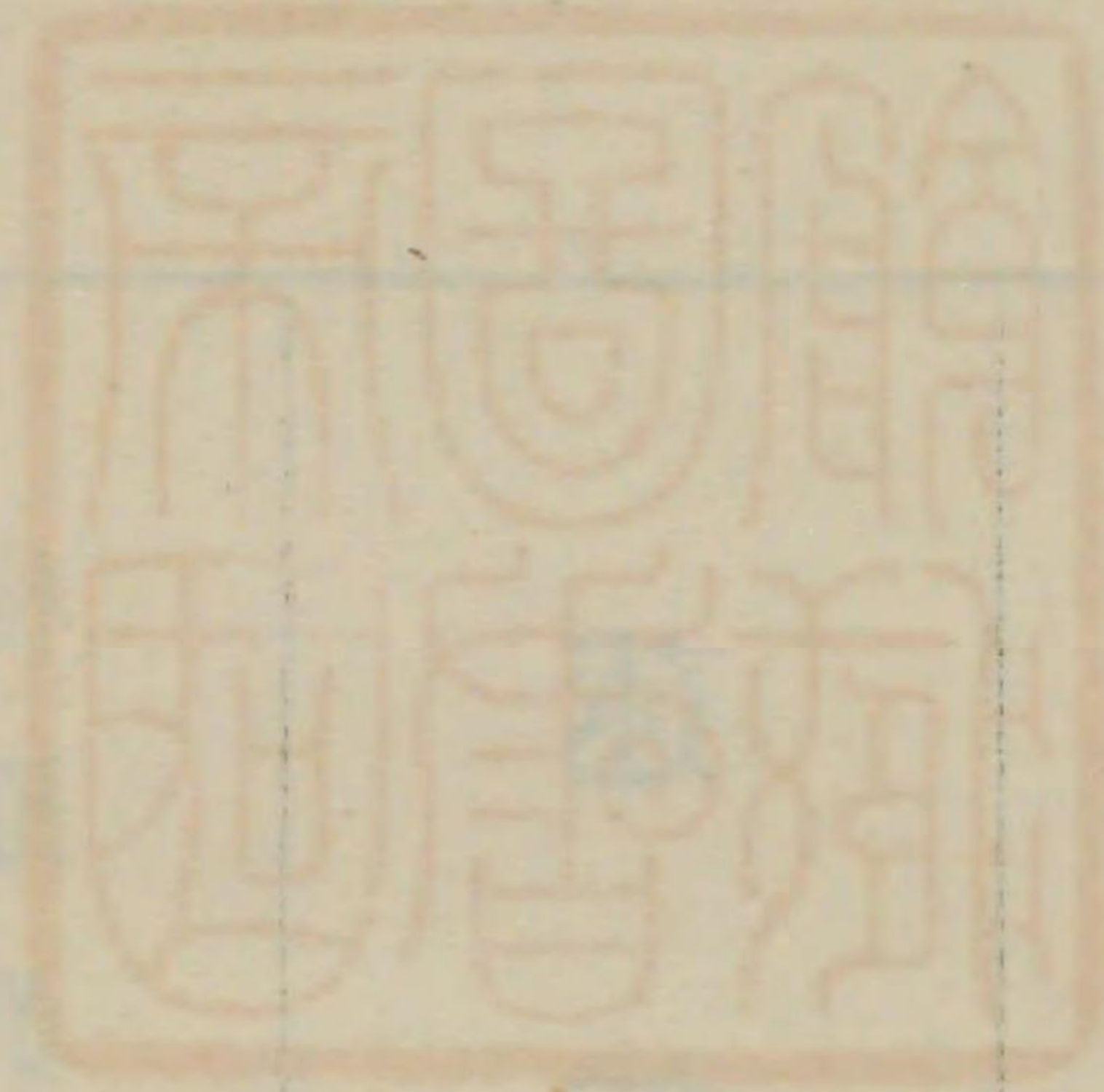
蓮如上人は最上の「法」を最下の「機」に光被せられた聖者でありました、蓮如上人は我等の言葉によつて法界の眞實を表現せられた聖者でありました、蓮如上人は祖聖親鸞の生命を嗣いで眞宗を再興せられた聖者でありました。

この聖者の風格を讃嘆するため茲に二三の小篇を蒐めました、若し法喜の助縁ともなれば有難いことでもあります。

昭和五年四月

洛東葛南小隱にて

梅原眞隆



目次

- (一) 蓮如上人……………(一)
- (二) 安心の一境……………(四)
- (三) 念佛三昧……………(七)
- (四) 彌生の蓮如忌……………(一〇)



上人

大阪の礎を運べる人

蓮如上人は本願寺の八代目の宗主であります、眞宗中興の聖者として私たちのいつも崇敬せうしあげてゐるお方であり、殊にわが大阪にとつては忘れてならない因縁を結ばれたお方であり、こゝに蓮如上人を讃仰することにしたのであります。また、動もすると蓮如上人は一般の俗衆から誤解されてゐられるやうにおもはれます。即ちお上手な妥協者であつたかのやうに、また不純な野心を抱いてゐられたかのやうに、少くとも親鸞を嗣ぐ方途としてはふさはしくないやうに批議するものもあります。かゝることが氣にかゝりましたので、上人の素純な温容をありのままに讃仰したい氣分になりました。また

尙ほもうひとつには、宗教のことはたゞこれを抽象的な論理で指示するよりも具體的な生活をとほして味ふことが、趣のあることのやうに考へまして、こゝに蓮如上人を勧請したのであります。

この前の國勢調査によると、わが大阪はわが國第一の人口を有するといふことで、まことに大大阪と云ふべき時代になりました。この大阪の草分けをなされたのは蓮如上人であります、これについては、曾て谷本先生が中島の公會堂で「大阪より觀たる佛教」といふ講演をなさつたときにも注意されたことでもあります、大阪の繁昌の由来をさぐるものは、豊太閤が大阪城を築いたことに氣づくでありませう、その大阪城は石山本願寺の基礎のうへにできあがつたものであります、而して石山本願寺の礎を運ばれたのはこの蓮如上人でありました、即ち明應五年、上人八十二歳の秋、始めて石山の地を相して草堂を建立な

されたのであります。してみれば、大阪の啓拓者として、草分けをなされた因縁は、大阪にすむ人々にとつて、殊に忘れがたいお方でありませぬ。

さて、上人は明應五年から御往生までの三年間といふものは、この大阪におすまひになつたので、つまり御晩年の勝境でありました。そして、この大阪の草堂は上人にとつても、最後終焉の地としてえらばれたのであつたのでありませぬ。

同年(明應八年)の二月には大阪の御坊にて御往生有べき様にて、御葬所までこしらへさせられけるが、俄に御思案ありて、城州山科へ御上洛あり云々と一期記に記してあります。かくて山科で御往生になつたけれども、殆んど最後まで大阪にゐらせられたのであります。かくて上人の最後の勝地が大阪の最初の礎になつたことは、大阪にとつてはなつかしい因縁であると思はれます。

さねばなりません。

最後の御正忌の御文

さて、大阪に最後の草堂をおつくりなされた上人の感懐を味ふてみますと、そこに上人のなつかしい人格が髣髴として偲ばれます、凡そ蓮如上人とはどんなお方であらせられたかと思浮べられます。その大阪御坊を建立なされた感懐はいろ／＼な文書によつてうかゞはれますが、今それをひとつ／＼味ふ時間もありませんから、そのうちの代表的なものとして、明應七年の御正忌に御染筆なされた御文を拜讀いたします。

上人の代表的な選述は御文であります、數おほき御文、いづれもすぐれたも

のですが、とりわけありがたいのは、年々の祖忌にもなされたものであります、なかんづく、明應七年の御正忌は上人の最後の御正忌であつて、ふかく死を覺悟したうちに御正忌に遇ふての御述懐をもなされた御文であるだけ、このときの御文は御遺教ともまうすべきものであります、まさに釋尊の涅槃經にも比すべき御文であります。こうした御文でありますから、たゞ大阪御坊建立の御感懐を偲ぶに足るだけでなく、上人の全き人格の發露ともいふべき御文であります。今この御文を拜讀しながら、いさゝか上人の溫容を瞻仰いたしたいとおもひます。

抑々當國攝州東成郡生玉の庄内大阪といふ在所は往古よりいかなる約束のありけるにや、さんぬる明應第五の秋下旬のころより、かりそめながらこの在所をみそめしより、すでにかたのごとく一字の坊舎を建立せしめ、當年はは

やすでに三年の歳霜をへたりき、これすなはち往昔の宿縁あさからざる因縁なりとおぼえはんべりぬ。

これが冒頭の一節であります、「大阪といふ在所」とさゝれた地點は今の第四師團のあるところで、そして、大阪といふ名がたしかな文献にあらはれるのはこの御文が最初であります。「往古よりいかなる約束のありけるにや」とか「往昔の宿縁あさからざる因縁なり」とか仰せられるところに、おのづからなる宗教的なるほひがあらはれて居ります。すべてのこと、ひとつも偶然といふことはない、無意味なものはない、われらにははつきりわからないけれども、みんななつかしい神祕的な因縁がからみついてゐることを感じられたのであります、三千大千世界にけし粒ほどの土地も如來の血涙のしみついてゐないところはないと云ふ安心決定鈔のおことばなどが思ひ合はされたことでありませう、

さては聖徳太子が難波に四天王寺を創立なされたことなども思浮べられたことでありませう、とにかく、上人にとつては最初の土地でありながら、なんだか最初の土地をふむやうな気がしなかつたのです、遠いむかしから約束せられた土地にきたやうに、しみとくと宿縁といふことをなつかしく、またありがたく感じられたのでありました。

これについて、この在所に居住せしむる根元はあながちに一生涯をこゝろやすくすごし、榮華榮耀をこのみ、花鳥風月にもこゝろをよせず、あはれ、無上菩提のためには、信心決定の行者も繁昌せしめ、念佛をもうさんともがらも出来せしむるやうにもあれかしとおもふ一念のこゝろさしをはこぶばかりなり。

蓮如上人が實如上人に職をゆづられたのは延徳元年、七十五歳のおんときで

ありました、故にいはいはゞ樂隱居の身の上であつて、大阪の御坊も隱居所としてつくられたものであつてよいのであります、一宗の再興を完成された上のことであるから、せめては餘生を氣樂におくられてもよいのであります、けれども上人は隱居の身分になつてからも依然として出口富田堺などの地を往返して教化に力を注がれたのであります、そして最後にこの大阪に御坊をつくられたのであります、その動機はこの一節にあらはれてゐるごとく、決して、樂隱居の休息と風流のためでなくて、最後の教化の地盤としてきづかれたのであります、一人でも信じてくれるやうに、一人でも念佛をまうしてくれるやうにといふ純な希念によつて大阪御坊がうちたてられたのであります、この尊い「一念のこゝろさし」をこめて大阪の最初の礎が運ばれたことをおもふとき、多少の感慨に打たれずに居れないのであります、われらの脚下には深い希念が

うちこまれてあるのです。上人の一生涯は、たゞこの素純な自行化他の一念によつてつき動かされたのでありました、われらはこうした尊い希念を素直に領納しなくてはなりません。

また、いさゝかも世間の人なんども偏執のやからもあり、むつかしき題目なれども出来あらんときは、すみやかにこの在所におひて執心のこゝろをやめて退出すべきものなり、これによりていよく貴賤道俗をえらばず、金剛堅固の信心を決定せしめんこと、まことに彌陀如来の本願にあひかなひ、別しては聖人の御本意にたりぬべきもの歟。

蓮如上人の經營のあとをみるもの、うちには、動もすると世俗的な勢力の擴大を企圖せられたかのやうに臆測するものもあり、とりわけ石山本願寺がのちに天下の武將と拮抗したことから逆觀して、教勢發展の支障點とし

ての要害を占有されたかのやうにながめる人々もありますが、上人は決してかかることを意識せられたのでないことが、この一節でもありとうかゞはれます、「少しでも世間の人が片意地なことをいひ出したり、むづかしい難題などいひかけられたら、すみやかにこの場所に心のこさずに引あげてよいのである」とまうされてあります、この大阪御坊が人の邪魔になるやうならいつでもひきあげるといふ謙虚な態度であります、大阪に御坊をつくられたのはたゞひとつの魂でも眞實によびさまさうといふ懇念より外に何もものなかつたのであります。それであるから、いよく病みふして再び起つことができなると覺悟なされたとき、満腔の懇念を披瀝して信心をいたゞくやうにと門葉に迫つて居られます、左にかゝげる最後の一節のごとき、涙なしには拜誦されない切々たる眞情の披露であります。

それについて、愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條不思議なり、まことに常流法義にもあひかなふ歎のあひだ、本望のいたりこれにすぐべからざるもの歎、しかれば愚老當年の夏ごろより違例せしめて、いまにをいて本復のすがたこれなし、つゝには當年寒中にはかならず往生の本懐とぐべき條一定とおもひはんべり、あはれく存命のうちに、みなく信心決定あれかしと朝夕おもひはんべり、まことに宿善まかせとはいひながら述懐のころしばらくもやむことなし、またはこの在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし、あひかまへてく、この一七ヶ日報恩講のうちにをひて信心決定ありて、我人一同に往生極樂の本意をとげたまふべきものなり、あなかしこく、明應七年十一月二十一日よりはじめてこれをよみて人々に信をとらすべきものなり。

この御文は一篇の散文詩であります、五帖御文のうち第四帖の第十五通に編まれてありますから、雨のふる夜など、しんみり落ついたときにひとりできりかへして拜誦していたゞいたら、この一通のうちにながれるおこゝろもちが誰れにも素直にいたゞかれます、そして蓮如上人といふお方の温容が髣髴として偲ばれます、「宿善まかせとはいひながら述懐のこゝろしばらくもやむことなし」と仰せられるあたり、ほんにやるせない希念であります、上人は終焉のときまで念じつゞけられました、御病床のおなぐさめに空善が鶯をまゐらせたとき、そのなく聲をきいておよろこびなされ「この鶯は法をきけよとなく也されば鳥類だにも法をきけとなくに、まして人間にて、聖人の御弟子也、法をきかではあさましきぞ」と仰せられたといふことであります、お念佛まうしてくれ、信心をいたゞいてくれといふ一念のまごゝろ、それが結晶したのが上人

の御一生でありました、かゝる御一生はすべての人々にとつてかぎりなく尊い
供養であります。「この在所に三年の居住をふるその甲斐ともおもふべし」とい
ふ一句も、とりわけ大阪にとりては味ふべきお言葉であります、塵勞にまみれ
た大阪のまんなかにしづかに合掌して念佛まうさるゝ人があらはれたとき、上
人ははじめて微笑されるときであります、大阪といふ都會の基礎にかゝる希念
の埋もれてゐることは意味ふかいことでもあります。

天王寺の土塔會

また大阪と蓮如上人をおもふとき、聯想されるのは、天王寺の土塔會におけ
る御述懐と、堺の日向屋についての御感想であります。

天王寺土塔會、前々住(蓮如)上人御覽候て、仰られ候。あれほどの多き
人ども、地獄へおつべしと、不便に思召候つる由、仰られ候。又その中
に御門徒の人は、佛になるべしと仰られ候。これ又ありがたき仰にて候。

(御一代記聞書)

その頃、天王寺の南大門の下に土塔塚といふのがあつて、そこに牛頭天王を
祀つた宮があつた、毎年四月十五日に祭がいとなまれて、天王寺の僧の舞樂な
どにて大變に賑ふたものらしい、それが土塔會と稱するものでありました。蓮
如上人はその土塔會に群る大衆が、迷信のなかに果敢ない幻影を弄んでゐる
のを御覽なされて、「あれほど多き人ども地獄におつべし」と仰せられました。
それは冷たい皮肉な言葉でなくて「不便に思召」れたのであります、かく仰せ
られた上人の眼底には涙が光つてゐたことがわかります。若し上人いまさば華

やかな現代の大阪の繁昌を視つめられたとき、またこの言葉をくりかへされな
いでせうか。

上人は愚な俗衆に媚びず、群り踊る俗衆の生活をみて、「ほろびてゆく生活で
ある、地獄におちる」と怖ろしい警策を與へられました、深刻な愛と、誠實に
眞實を説破された勇氣とを見出さずに居れないのであります。

堺の日向屋

大衆の迷妄を鋭く批判して憚らなかつた上人は、また特権階級の生活に向
つても率直に批判せられました。

蓮如上人仰られ候。堺の日向屋は三十萬貫を持たれども、死にたるが佛に

はなり候まじ。大和の了妙は帷一つをもきかね候へども、此度佛になる
べきよと、仰られさふらふ由に候。(御一代記聞書)

そのころの堺は外國貿易の要港であつて、今日の神戸や横濱のやうな繁華な
土地でありました、その土地の日向屋は有名な資産家であつたに相違ありませ
ん、しかし三十萬貫の黄金も生命の糧にはならないのであります、黄金をつか
んだら眞實に生きられるとかんがへて専念に努力してゐる無自覺な生活の幻影
を摧破せられたのが、この仰せであります。

特権階級や資産階級の機嫌を窺ふて、それとなく眞理の割引をしたり、いつ
はりの證左を弄ぶ人たちは、こうしたお言葉のまへに懺悔しなくてはなりませぬ、三十萬貫の黄金も念佛のまへには土くれにひとしい、眞實に生きるものはほろびない念佛に更生しなくてはならない、こうした見地から、金に埋もれ

た豪奢な日向屋と帷一枚きかねた貧しい了妙とを比べて、その価値の顛倒を示されたところに上人の信念が光つて居ります。

動もすれば上人の生活をながめて、巧みに金持を取こみ、俗衆に阿つて、本願寺の地盤をきづかれたお方であつたやうに誤解するものもあるが、こうした仰せを味ふだけでもそれらの誤解をとりのけなくてはならない、上人は眞摯に率直にそして誠實に、眞實をかたりつゞけられた純なお方であつたことを仰がねばなりません。

上來、大阪と蓮如上人についての雑感を思ひ浮ぶまゝにのべましたが、それはたゞ大阪と上人といふ關係にかざられるものでなくて、そのまゝ、至き人生と上人との交渉を伺ふに足るべく、人生と宗教との生ける關係を暗示するものであります。

御本尊の純化

次に親鸞聖人を嗣ぐものとしての蓮如上人を思ひうかべてみようとおもひます、これについての私見はすでに「親鸞聖人研究」にも縷述しておいたことでもあります、約言すれば蓮如上人は祖聖の復活者でありました、「親鸞にかへれ」とはその一生の根基をなす標語でありました、「御本寺をば(親鸞)聖人御存世の時のやうに思召され候、御自身(蓮如)は御留守を、當時御沙汰候」(御一代記聞書) こうした復古運動はいろ／＼な方面にあらはれて居りますが、まづ注意すべきことは御本尊の形式を純化なされたことであり、御本尊の形式を純化するといふことは一宗派としてはよほご思切つた試みであることは

云ふまでもありません。

「御流にそむき候本尊以下、御風呂のたびごとにやかせられ候」(御一代記聞書)とある記録をよんでも、木像を焼いて凡僧の偶像觀念を打破した丹霞のやうな鋭い識見がひらめいてゐることを感じます。生命は具象化してゆくものであります、具象化してこそ生命が完全に人生の内容となるのであります、けれども具象化することゝ偶像化することゝは似たやうで實はすつかり違ふのであります、表象は生命の顯現であり、偶像は生命の滅亡であるのです、あれ一流の御本尊もいつしか寺院といふ形式に制約されて偶像化されてしまひました、そこで、かの「當流(眞宗)には木像よりはるぞう、繪像よりは名號といふなり」として木像や繪像の本尊形式をとりのけて名號本尊に還元されました、これはあらゆる偶像的固定を打破して生ける眞佛を解放せんとする批判であり

ます、そして、御草庵に名號を本尊としてひざまづかれた祖師聖人のひかしにたちかへらんとする復古の希念があらはれてゐるのであります。

なほ上人が、數おほくの名號を御染筆なされて、門徒へ御授與になつたことも、全くこの復古の努力であります、そしてその名號を御染筆なされるのにも、「南無の字は(親鸞)聖人の御流儀にかざりてあそばし」といふことも、なつかしい復古的還元のおこゝろもちがしのばれます、親鸞聖人は「南無」の「無」をば無の字の古字の「无」をおもちゐになりました、その「无」の字形も一字の上に爪のある殖一の流儀でありました、蓮如上人はこの祖師の流儀でしるされたといふのであります。

一面において御本尊を焼くほどの非凡な識見を示されると共に、一面においては一點一劃をも私せない細心な用意がありました、大膽と細心との周備し

た上人の性格は恭敬すべきものであります。細心をかいた大膽は生命をきづ、
け、大膽をかいた細心も生命を見のがすものであります。上人のやうな行届
た人格によつてこそ、始めて衰頹せる一宗を純全に復活することができたので
あります。

威儀をはねのけて

また善如上人、綽如上人の兩御代は「威儀を本と御沙汰なされし由」を仰せ
られて、「この二幅の御影をも、やかせらるべきにて、御取り出し候ひつるが、
いかゞと思召候ひつるやらん。表紙にかきつけて、よしわろしとあそばされて
とりてをかれ候」(御一代記聞書)といふ記録があります。

蓮如上人の以前は本願寺としては暗黒時代であつたやうであります。「蓮師以
前には浄土宗の流儀多くうつりて、種々の邪義出て(中略)常流の正義は誠に
知る人稀なり」(本願訣)とあるごとく正しい信仰の生命は見失はれてゐたので
あります。従つてたゞ形式を構へることに氣を奪はれてゐられたやうです。
玄康法印(巧如)圓兼法印(存如)も、時々形儀をも聲名をもかたく教へまし
まししかども、又田舎の衆にても、對座にて、一首の和讃の心などを、
仰せ聞せられたることなし。(山科連署記)
巧如上人の頃には、威儀をのみ重んぜられたればそれがために歸依者も少く
なりて宗門は衰頹せし由。(破邪問答)
これらの記録をみても蓮如上人の以前の本願寺は、純正な生命を見失ふて、
たゞ威儀の形式によつて白く塗られた墓のやうなものであつたことが想像され

ます。

愚禿の後裔が黄袈裟黄衣の威儀を粧ふて、いつしか貴族化し聖者化してゆくことは淺間しいことゝ慚愧せられて、先代の御影をも焼きすてんとまで感傷せられたのであります。

それで上人は「無紋のもの」をきることさへ遠慮されて、ひたすら「殊勝さうにみゆる」聖者的威儀をさけられました、そこでたとひ「牛盗人といはるるも、佛法者後世者と見ゆること」をさけて、専念に内なる生命を哺まれたのであります。

かやうに、偶像の固定をぶち破つて眞佛を解放し、形式の威儀をはねのけて愚禿の信心に住せられた批判のこゝろを思ふとき、蓮如上人は親鸞聖人の後裔として、いかにもふさはしいお方であつたことが分明とうかゞはれます。

同朋愛の發露

更に注目すべきことは同朋愛の實現であります。

蓮如上人は上壇の座をひきさげて、同行と共に平座にて對面なされたといふことであります。一段たかいところに坐つて同行に對することがどうしても落つけなかつたのであります、封建的な時代に生れて、高いところに坐ることが寧ろ自分の卓越を示すやうに考へられた時代にあつて、かゝる態度をとられたことは注目すべきであります。

身をすてゝ、平座にてみなと同座するをば聖人のおほせに、四海の信心のひとはみな兄弟と仰せられたれば、その御ことばのごとくなり。(御一代記聞書)

これ「親鸞は弟子一人もたず」といふ祖聖の御持言を、身を以つてうけつがれたのであります。

「法敬とわれとは兄弟よ」と親しまれた、御堂衆といふ低い職掌の人と、本願寺の法主とがこうして兄弟として握手されたところに、親鸞教のあたゝかいところがあります。

また、門徒を大切になさつたことは非常なものでありました。「開山聖人の一大事の御客人と申すは、御門徒のことなり」と仰せられ、「御門徒衆をあしく申事、ゆめ／＼あるまじきなり、開山は御同行御同朋と御かしづき候に、聊爾に存ずるはくせごとの由」仰せられました、寒いときには酒をあたゝめて歡待なされたこともあり、怠屈してるときは可笑しい狂言などして門徒をなぐさめられたといふことであります。

塔會に俗天王寺の衆士を批判して「地獄におつべし」と批判された上人が、その門徒のまへにかゝる態度をとられたのであります、これを以てたゞ巧みに門徒をあつめた技巧とみてはなりません、温いそして謙虚な同朋愛の發現であります。

上人の御一生において、本願寺は日本に於ける最も力づよい教團となりました、餘他のすべての宗派はみんな特權的な勢力に依存し、封建的な因襲によつて、その地盤をきびいたのであります、上人は全くそれと趣を異にして素純な同朋意識のうちに本願寺をうちたてられました、敢て外的な發展を期待されなかつたのであります、「一宗の繁昌と申すは人の多くあつまり威の大なる事にてはなく候、一人なりとも信を取るが一宗の繁昌にて候」とひたすら純な内的な充足をもとめられたのであります、温切な同朋意識が自然にあらゆ

る民衆をひきつけて、やがては織田右府の百萬の兵をもつてしても、左右することのできないほどの健實な教團がうちたてられたのであります。

すべては「親鸞にかへれ」の一念の發露であつて、つまり、蓮如上人は純全に祖聖親鸞を嗣げる再興者であらせられました。

祖聖のおん前に跪きて

「親鸞にかへれ」といふ復古運動はさきにもつたやうに、蓮如上人の一生の基調でありました、勤行の様式をあらためられたことも、亦この復古運動のひとつのあらはれ方でありました。

當流朝暮の勤行、念佛に和讃六首加へて御申候事は、近代の事にて、昔も

斯様には御申ありつる事有げに候へども、朝暮になく候つるときも申候存如上人御代まで六時禮讃にて候つるとの事にて候、(中略)文明の初頃まで、朝暮の勤行には六時禮讃を申て侍りし也、然るに蓮如上人、越前の吉崎へ御下向候ては、念佛に六首の御沙汰候しを承候てより以來、六時禮讃をばやめ、當時の六首和讃を致三稽古、瑞泉寺の御堂衆も申侍し事也。(實

悟記)

つまり、これまでは淨土門の通規に準じて善導大師の六時禮讃を勤行に諷誦することになつてゐたのであるけれども、かゝる儀式は日常生活に取まぎれてくらししてゐる一般の生活には適切でないことでもあり、また一宗としての特質も認められないので正信偈と念佛に和讃をまぜていたゞくにせられたのであります。そこで、文明五年の三月には正信偈と三帖和讃とを開板して、ひろ

く一般の信徒の拜誦を差許されたのであります。この正信偈と和讃はいふまでもなく親鸞聖人の代表的撰述であつて、一流の精要を表現したものであります。正信偈は御本典即ち教行信證の行信兩卷の蝶番ひをなす偈頌であつて、一宗の本質を純全に表詮せられたものであり、また和讃は和語の御本典とも稱せらるゝところであります、かくて、朝な夕な御内佛に跪いて念佛申しながら、こゝろ静かに正信偈和讃をいたゞくとき、坐に親鸞聖人の膝下に侍つてまのあたりその慈育を蒙るやうなつかしい法味が内感せられます、こうして門徒の大衆がうちつけに佛徳を讃嘆し聖人に親炙することのできるやうに朝夕の勤行を簡潔にして純淨にせられたことは、適切な試みでありました。

而して朝な夕な佛前にて正信偈和讃をいたゞく心得についてもねんごろにおさとしなされて、自力の行者のやうな堅苦しい律法化に囚はれたり、また不純なまゐらせごゝろに落入らないやうに注意されてあります。御一代記聞書には次のごときお言葉がしるされてあります。

一。十月二十八日の連夜に(蓮如上人)のたまはく、正信偈和讃をよみて、佛にも聖人にもまゐらせんとおもふか、あさましや、他宗にはつとめをもして廻向するなり、(聖人)の御一流には他力信心をよくしれとおぼしめして、聖人の和讃にそのこゝろをあそばされたり、ことに七高僧の御ねんごろなる御釋のこゝろを和讃にきゝつくるやうにあそばされて、その恩をよく存知して、あらたふとやと念佛するは、佛恩の御ことを聖人の御前にて、よろこびまふすこゝろなりとくれぐれ仰られさふらひき。

一。(蓮如上人)のたまはく、朝夕、正信偈和讃にて念佛まふすは往生のたねになるべきか、たねになるまじきかと、おのゝ坊主に御たづねあり、みな、

まふされけるは、往生のたねになるべしとまふしたるひともあり、往生のたねにはなるまじきといふひともありけるとき、仰に、いづれもわろし、正信偈和讃は、衆生の彌陀如來を一念にたのみまゐらせて後生たすかりまふせとのことはりをあそはされたり、よくきゝわけて信心をとりてありがたや〜と、聖人の御前にてよろこぶことなりと、くれ〜仰さふらふなり。

この御さとしは、いかにも懇切なものであります。私たちは朝な夕なお内佛の前にぬかづいて正信偈和讃をいたゞくのは、この勤行や讀誦の功德をつみ、それをふりむけまゐらせて、往生の因種にしようなどいふ自力修善のいとなみでないことはいふまでもない。それかと云つて、無意味な空虚な形式に終るのでもない。祖聖のおことばをいたゞくのはそのまゝ祖聖のおほせを蒙つて、救はれゆくことわりをさゝひらくことであり、また、救はるゝ身の法喜を感謝

することであるとの仰であります、してみれば勤行こそ凡人生活における念佛の三昧境であつて、如來聖人の恩徳を仰ぎ、絶對救濟の光悦を慶ぶ聖なる道交の一境であります。「ありがたや〜と聖人の御前にてよろこぶ」勤行のこゝろもちには、かぎりなくなつかしい豊かな情趣がこもつて居ります。

こうして、蓮如上人が自然に無理のかゝらないやうに、宗教生活を深めるやうに、祖聖の御前に跪いて、合掌のうちに日ぐらしできるやうに御そだて下されたことを感謝しなくてはなりません。

凡衆の聖典としての御文

朝夕の勤行に正信偈和讃をいたゞくと共に、最後に御文を拜讀することも慣

例になつて居ります、御文の拜讀は蓮如上人の御存生のうちにも堺の御坊にて參詣の人々によんできかせられたことでもあります。

蓮如上人五帖の御文被遊候て、實如上人へまいられ、これに御判を据られて、天下の尼入道へ御免あられ候へ、これにすぎた佛法の義とは別にありやるまじいぞと仰られ候、これによりて實如上人御代にては京田舎ともに御文いよ／＼肝要と仰いだされ候。(榮玄聞書)

そして上人の示寂の後はこのを一般に頒布して勤行の折に拜讀することゝなり、遂に圓如上人の五帖御文の編纂となつたのであります、五帖御文はすべて八十通であるけれども、上人の御一生にものされたものは數おほいもので、現存する丈けでも二百六十六通の多きにのぼつております。

この御文はさきにのべたやうに、蓮如上人の御教化の結晶した代表的撰述であります。

あります。

上人が御文を御つくりなされたお心持はきはめて明白でありまして、どんな愚な人々にでも一宗の本質をまちがひなくのみこめるやうに、すべての人々に如來の招喚をつたへるやうにとの親切より外にはありません、上人は眞實を發掘する啓拓者ではなくして、上人は祖聖の領納された眞實をすべての民衆のものとして徹底せしめることを念願せられたお方でありました。

御文のこと、文言おかしく、てにをはもあしく侍れども、もし一人も信をえよかしと思ふばかりにて書をき侍り、てにをはのわるきをわがどがといふべしとぞ仰らる。(二期記)

かる／＼と愚痴の者のはやく心得まひらせさふらふやうに、千の物を百に選び、百の物を十に撰ばれ、十の物を一に、早く聞分申様にと思召され、御文

にあそばしあらはされて、凡夫の速かに佛道なる事をおぼせてられたる事にてさふらふ。(御若年の砌の事)

つまり、どんな愚なものでも、適切に一宗の眞髓をいたゞけるやうに、平易にかみください、簡明に洗練しておしめしてくださいのであります、民衆の聖典としてはこの御文に比ぶべきものはありません。

けれども、平易であり簡明であるといふことは、決して淺薄であるとか未盡であるとかいふことでありませぬ、上人は最高の眞實を普遍の生命として流露せしめられたのであります、やさしいおことばのなかに、深い法味と純な眞實とがあらまゝにふくまれて居るのであります。こうして一宗の精要をやさしくかみくだかれるまでには異常な辛苦をなめ努力を支拂はれたのであります。貧しい御生活のうちに油なども不自由な折には、黒木を焼きて聖教をよみ、月

夜には月の光で讀書なされ、とりわけて教行信證のごときは讀みやぶられたといふことであります。かゝる苦心の結果、愚な無耳人にもあきらかに招喚の勅命をきかしむるやうに御文をもつたのであります。さればこそ御文は如來の眞言としての權威を帯て恭重されたのであります。

御ふみをば如來御直説と存すべきのよしに候、かたちをみれば法然、ことばをきけば彌陀の直説といへり。(御物語次第)

また、上人御自身にとつても、この御文は會心のものであつたとみえます、御往生の三日まへに次のごときことが傳へられてあります。

蓮如上人、明應七年の夏頃より御煩ひにて、明應八年の三月二十五日に御往生にて候、しかれば二十五日三日まへに、法敬坊に御文よませ申され候て御聽聞なされ候、一段御感じなされ候、おれがつくりたるものなれど

も、まづは殊勝なるよなと仰られ候、おれが聞様に、門徒の者が聞くこと
ならば、みな信をえられうずるぞと仰られ候。(榮玄問書)

御終焉にちかき上人が、みづからものされた御文を聴聞して殊勝であるとお
よろこびなさるお姿は、名匠が自分の刻んだ佛像を拜んでゐるやうな床しい風
格であります、そこにはみづからつくつたといふころもちよりも、如來のお
ほせられたお詞ときとれることでもあります、「かやうにみなく、申言葉まで
も、みな彌陀のいはせらるゝ事おやぞ」と仰られたといふことであるが、こう
した妙趣が自然に味はれます。

たうとい真如はつねにすべてを露現して居ります、正覺の大音はあらゆると
ころに響流して居ります、けれども、その真如を認め、その梵音をきく能力の
ないわれらは無耳人であり無眼人であります、こうしたあはれな凡衆のために

ものされた聖典が御文でありました。

たすけたまへとたのため

この御文には一宗の真髓がいかにも、物柔かに、しかも的確に道破せられて
あります。

親鸞聖人の御流は、一念のところ肝要なり、かるがゆへにたのひと云ふこと
は、代々の祖師あそばしをかれたれども、くわしく人々も領解なく候しに
先師(蓮如)上人、御文と申物に、あそばしをかるゝ仰に、後生たすけ給へと
一念に彌陀をたのめとの仰にて、各あきらかに心を得たり、然らば先師(蓮
如)上人は一流の中興上人にてましますと申事、此故也。

こゝに示されてあるとほり「たすけたまへとたのめ」といふことをあきらかにせられたのが御文の根本要義であつて、やがてそれが上人のすぐれた貢献であつたのであります、さてこの「たすけたまへとたのめ」といふことは他力の信心の味ひを示されたのであつて、双手はなしておまかせし切る絶對歸依のころをあざやかに示されてあります、更にこれを鮮活にいひあらはして「阿彌陀ほとけの御袖に、ひしとすがりまいらするおもひをなして、後生をたすけたまへとたのみまうせ」と仰られてあります、すべてのはからひをうちすて、如来のお慈悲ひとつに身もころも一切合財任せきつたありさまが素純に表現されてあります、信仰とは全人格的な肯認であります、薄紙一枚のへだゝりもない念佛の三昧境がいかにも力づよく生々と表詮されてあります。

この信心の一境が古來いろ／＼の言語によつて表詮されてきました、いま蓮如上人は物柔かな使ひなれた平明な日本語によつて表詮されたのであります、つまり「私たちの言葉」によつて遺憾なく云ひあらはしてくだされました、これによつて一人ものこらず真宗の信心を紛ふことなく領納する機縁が成就されたのであります。

尤も、のちにはこの「たすけたまへとたのめ」といふことが、自力のはからひを運ぶことでもあるやうに誤つた人たらしもないではありませんでした、それは宗教的經驗について眞摯な理解と素純な感觸を有せない人々の傷ましい躓きにすぎませぬ、若くは、文字や論理を弄んで生ける宗教心を見わすれたものゝひねくれた小賢しいはからひにすぎませぬ。

すべてをお任せするころ、全人格的な歸投はこのまゝ、すべてをこのまゝ、收めとつてすてたまはぬ佛心のあらはれであります、いつも母の袖にすがる子

四二
供のすがたは愛を求めていのる淋しい表象でなくて、何となくたよらずに居れない、慕はずに居れない母の慈愛の自然な影現に外なりませぬ。

「たのめ」とはおまかせすること、よりかゝること、よりたのむこと、即ち信任であり、依憑である、歸投である。つまり、如來のおほせにしたがひ、めしにかなふ絶対信順のこゝろであります、そして「たすけたまへ」とはその信相であります。これを、かれこれとひねくれた詮議をして自力の祈願や凡夫の運心のやうに誤解するのは、いかにも心なき業であります、それらについては、宗學的な論證をしてその謬解を打破することも無用ではないが、それよりもつと端的なことは、素直に上人のおことばをいただいて、その素純な語感を味ふことが大切です。そうすればおのづから紛ふことなく他力信心の妙趣が味はれることでもあります。

名もなきわれらの平凡な言葉のうちに、のこるところもなく、希有最勝の第一義諦を表詮されたところが非凡な試みであります、そして親切のこもつた教示であります。

總ぐるみのおたすけ

一人は全人格的な歸依によつて更生されました、それであるから、全き生活をひつさげて、身もこゝろも一切合財總ぐるみのおたすけを慶喜せられました、彌陀をたのめば南無阿彌陀佛に身をばまらめられた、法悦を経験せられました。

全き生活、それを通俗的にわかりやすく云へば衣食住の三つであります、上

人は貧しい生活をなさつてこの衣食住もことごとく窮乏のありさまでありましたけれども、御光に養はれて生かされた上人は貧しい生活のうちにもちつとも不足や窮乏を感じないで、たゞありがたい御勿體ないといふ冥加を感戴せられたのであります。

一、晝夜不斷の仰には、第一冥加の方を上下共に心得べき由の仰のみ也。就其仰の品々あり、あたらしき物をめされし時は必ず聖人の御前へ御参りありて、聖人へ向ひまいらせられ、御用にて是御着用也ありがたく候と御えりを引出されて、御前にて見せまいらせられけりと也、きこしめさるゝ物にも御身にめさるゝ物にも、不斷御用の程を思召しける體是あり、もとより御詞にも出され、毎日毎夜冥加の段、堅仰られし事なり。(一期記)

一、衣裳等にいたるまで我物と思ひ、踏たくくる事淺間敷事なり、悉く聖人の御用物にて候間、前々住(蓮如)上人はめし物など御足にあたり候へば御いたゞき候由うけたまはり及び候。(御一代記聞書)

衣服を新調なされたときは、まづそれを祖師聖人の御影前へ持参して、しみじみといたゞいてお禮をまうされてから着用なされたといふのであります。すべてが白毫の恩賚であるといたゞかれたからであります。それゆゑに御自身の御召物がはからず御足にあたるときなど御勿體ないと御いたゞきなされたといふことであります。なんといふ床しいお姿でありませうか。

一、或夜、老少男女上下共に參集の時、あら空おそろしや、世間には物も食はずして寒がるものも多きに、食たさまゝに食て、着たさまゝに物を着る事は聖人の御恩なり、この御恩ををろそかに思ひ侍るはあさましき事なり。

(一期記)

一、御膳まゐり候時は御合掌ありて、如來聖人の御用にて着食よと仰られ候。(御一代記聞書)

一、蓮如上人、物をきこしめし候にも、如來聖人の御恩にてましく候を御忘れなしと仰られ候、一口きこしめしても思召出され候由仰られ候。(御一代記聞書)

一、御膳を御覽しても人のくはぬ飯をくふことよと思召候と仰られ候、物をすぐにきこしめすことなし、たゞ御恩のたふときことをのみ思召候と仰られ候。(御一代記聞書)

すべてが御恩のかたまりである、單なる物質をかみくだくのではない、一碗の飯はそのまゝ生ける慈愛のかたまりである、こうして御恩を感じながら合掌せられたとき、お粗末な食物がそのまゝ百味の飲食のやうにいたゞけたにちが

ひありませぬ。

前々住(蓮如上人)仰られ候、家をつくり候ども、つぶりだにぬれずば、何

とも角ともつくるべし、萬事過分なることを御きらひ候。(御一代記聞書)

質素な家のなかにお念佛して安らかにおくらしなされたお心持が偲ばれますよろづのこと、過分なることは落つけないとおきらひなされた上人のころは素純であり謙讓でありました、御恩のなかにまゐらるめられて生かされることを思へば、とても、ぜいたくなことはできなかつたのでありませう、いかにも床しいおこゝろもちであります。

衣食住についてこのとほりであるから、すべてのことが推量せられます、かの御廊下をとほりなされて紙切のおちてゐるのを拾ひ上げて「佛法領のものをあだにするかや」と仰られたことや、番匠などを使はれたときも「いさゝかな

る木のきれはしをとりをかせ、大切にすることは佛法のものとおもふゆへなり」と仰られたことなど、上人の御生活を追憶すると、どんな斷片にも美しい光があります、なつかしい感じがいたします。

蓮如上人の御一生はさながら生ける曼荼羅でありました。生命のかよふた經藏でありました。

安心の一境

凡衆を養ふ愚禿の裔

蓮如上人は本願寺第八世の宗主であらせられ、淨土眞宗の中興の聖者であらせられました。

親鸞聖人を啓拓者とすれば覺如上人は傳持者である、そして蓮如上人は弘通者とまうすべきであります。淨土眞宗がわが國に於ける最も有力な宗派として津々浦々まで弘まつたこと、すべての群生の歸仰をあつめることになつたのは、全く、この蓮如上人のおかげであります。

上人の御足にきらりと草鞋のあとが喰ひこんでゐたといふことでありますがまことに上人は一生をさへげて大悲傳普化の聖業に奉仕されたのであります

そして、上人は最高の大法、すなはち最もすぐれた宗教的眞理を、何等の教養もない凡衆に徹底せしめねばやまない慈愛と熱誠を有してゐられました。今日われわれが朝な夕な拜誦して法味を愛樂する「御文」は上人の教化の結晶でありまして、全く凡夫往生の手鏡であります、凡衆の聖典としておくられたものであります、上人は誰れでも如來のお慈悲をいたゞけるやうに物柔らかな愛語をもつて、かんでくゝめるやうにおさとしてくだされたのであります。

上人は學者のやうに語られなかつた、また上人は聖者のやうに振舞はれなかつた、あくまで「愚禿の裔」として、一切の群生とともに眞實を慕ふて迎られたのであります。上人ほど凡衆を動かしたお方はない、それは決して偶然ではありません、上人は凡衆のうち身を投じて凡衆と共に救はれたお方であつたからであります。

新しき日本語の表現

五二

蓮如上人の御教化は「御文」にまとめられてあります、そしてその精要を詮じつめると「たのむ」といふ一語に結ばれるのであります。ある方のしらべたところによると、八十通のうち五十六通までこの語が示され、さらにその數が百三十三あるといふことであります。形式のうへから云つても、上人の御持言であつたことが首肯されませう。

尤も、この「たのむ」といふことは蓮如上人がはじめて、おもちゐになつたのではありません。相承の先徳がすでにお須ゐになつて居るのであります。源信和尚の「横川法語」にも「信心あさけれども本願ふかきがゆゑに、たのめ

ばかならず往生す」とあります。そして法然上人も、親鸞聖人も、この語をおもちゐになつて居ります。それからのち、多くの方々によつて須ゐられたのではあります、それにもかゝはず、この「たのむ」の語は蓮如上人の標語とみてよいのであります、蓋し蓮如上人の手によつて、力づよく且鮮に一宗の精要をしめす教語となつたからであります。

上人はこの「たのむ」の語に「たすけたまへ」といふ語を冠らせて、「たすけたまへとたのむ」とおほせられました、こゝに上人のすぐれた釋功があるのであります。

(親鸞)聖人の一宗はたのむ一念の處肝要なり、かるがゆへに、たのむといふ事をば、代々あそばしおかれ候へども、くわしく、なにとたのめといふことをしらざりき。しかれば前々住(蓮如)上人の御代に、御文をつくり候ひて、

五三

雑行をすて、後生たすけたまへと一心に彌陀をたのめと、あきらかに、しらせられたり。しかれば、御再興の上人にてましますものなり。(御一代記聞書)と讃えてあります。まことに、そのとほりで、「たすけたまへとたのむ」といふことは上人の教化の特徴とまうさねばなりません。「たのむ」といふだけでは、いかに「たのむ」ことであるかわからないかも知れないといふ懇切な御心づくしから、その「たのむ」こゝろを具體的にお示しになつて、「たすけたまへとたのむ」のであると仰せられたのであります。いかにも物柔かに、一宗の肝要たる信心をおしめしくだされた教語であります。

この信心をあらはす語のうち、「南無」といふは天竺の語であり、「歸命」といふは支那の語であります、そしてこの「たすけたまへとたのむ」といふは日本の語であります。この日本の語で表現されたところに上人のねんごろなお心づくしがこもつてゐるのであります。

信心安心といへば、愚痴のものは、文字もしらぬなり、信心安心などいへば別の様にもおもふなり。たゞ、凡夫のほとけになることを教ふべし、後生たすけたまへと彌陀をたのめといふべし、なれたる愚痴の衆生なりとも、ききて信をとるべし、當流には、これよりほかの法門はなきなりと仰せられ候

(御一代記聞書)

おもふに、上人は學問などしない文字をも知らぬ凡衆を救ふて、聖化の生活を圓成するために、日本人の念持しやすい日本の凡衆の言葉によつて、眞實の信心を表現されたのでありませう。こんな點に注意してみますと、この「たすけたまへとたのむ」といふ教語には、いかにもすぐれた智慧がひらめき、ふかい慈愛のこもつてゐることを感戴せずに居れないのであります。

大悲の勅命に信順せよ

さてこの「たすけたまへとたのむ」といふ教語は絶対歸依の信樂をのべられたのであります、くわしくいへば「たすけ給へる彌陀如來の不思議の本願力なりとふかく信ずる」(御文) ことであります。やさしくいへば「おたすけくださるお慈悲におまかせする」といふ意味であります、即ち素純な信順のこゝろであります、親鸞聖人の「仰せにしたがひ、めしにかなふ」(銘文) とのたまふお言葉とおなじ調子と意味をもつた和語であります。

ところがこのありがたい教語を、あるとき正しい意味を取そこなふ人々があつて、凡夫が如來に祈り求めるやうに解釋したので、かなしくつまづいた人々もありました。そこで、動もするところの教語をなにか危いものゝやうに慮る傾向もないではありませんが、それは「あつもの」に懲りて「なます」を吹くやうなものであります。私たちはこの上人の慈愛のこもつた、そして行届いた教語に素純な親しみをとりかへたいものであります。

「たのむ」といふ語を抽象して一般的な解説をさがしたら、かなり多含な語であるから、請求や祈願の意味はないでもありません、しかし、これが蓮如上人の教語となつたときは秋毫もかゝる意味をもつて居らないのであります、本如上人が御裁斷申明の御消息に、

彌陀をたのむといふは、他力の信心を安く知らしめ給ふ教示なるが故に、唯是れ大悲の勅命に信順するこゝろなり

とお示しなされたとほりであつて、たすけたまふお慈悲におまかせをしたのが

「たすけたまへとたのむ」ころであります。われをたのめといふ勅命に素直におしたがひまふすことでもあります。

従つてたのむ信心は、めぐまれたものであります。たのませてたのまれたまふのであります、たのむころはたのませてたのまれたまふ佛心の領納に外ならないのであります、親鸞聖人の自然法爾章に「南無阿彌陀佛とたのませてむかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまうすなりときいて候」とおしめしになつたとほりであります。曾て近江の金ヶ森にまうでたとき、蓮如上人の御眞筆の三首の御詠歌を拜見いたしました、その第一首にいはいはく、

南無といふ二字の内には彌陀たのむころありとは誰もしるべし

この御詠歌は「たのむ」ころが名號のうちに成就されてあることをねんごろに示されたものであります。

信心は佛智なり、佛智よりたのませらるゝ信心也と心得べし、たゞ彌陀如來のたのませられて御たすけあると心得べし、一向に他力也。(一期記)

この「たのませられて御たすけある」ことを、おたすけくださるとたのむので、全く他力のおめぐみであります。

「たのむ」といふことは言葉の當面の意味として信順であること、更に、その發起するところを内觀すると全く他力のめぐみであつて、すこしも自力の祈願を意味しないのであります。

すべてを與へすべてを統ぶ

たのむところ、おまかせするところ、この絶対依憑の信心は聖化の體驗であります。

聖化といふこと、すなはち救ひといふことは、われらが如來とひとつになることでもあります、このわれらが如來とひとつになりきることは宗教の極致であります。

そして、この聖化が宗教の極致であるだけ、宗教の實踐上の問題となつてきました、宗教にさまゝの宗派のわかれたのは、詮ずるところ、この聖化の實踐法における見方の相違によるといつてもよいくらいであります。

この宗教の中心問題の上にわが浄土眞宗は眞實の聖化を如實に開顯されたのであります。則ち、凡夫が如來とひとつになるといふことは凡夫のはからひによつて成就されることではなくて、如來が凡夫とひとつになつてくださるおんはからひによつて成就されるといふことを開顯せられたのであります。これすなはち他方同向の妙趣であります。

聖化といふことは聖そのもの、自爾の開展によるのであります、如來とひとつになれるのは如來そのもの、自然法爾のあらはれであります、このありさまをわかりやすく示されて、蓮如上人は機法一體といふことをくわしく談ぜられました。

南無阿彌陀佛といふ如來の名號は、たゞ一切の群生を救ひたまふ客觀の「法」として成就されてあるだけでなく、客觀の「法」がそのまゝ一切群生の心行として主觀の「機」となつてあらはれてくださるやうに圓成されてあるのです。こゝに如來と凡夫との統一、法と機との一體が如來の名號即ち「聖」そのもの、内面性として成就されてあるのであります。わかりやすくいへば名

號はたゞ如來の法であるだけでなく機きの信心しんじんとなつてくださる、すなはち、如來が凡夫ぼんぷとひとつになつてくださるのであります。

さて、如來が凡夫ぼんぷとひとつになつてくださるおんはからひを窺うかがふとき「廻向えきやう」と「攝取せつしゆ」といふことがたうとく味あじはれます。

廻向えきやうとは「おめぐみ」くださることである、即ち如來にょらいが如來にょらいそのもの、生命せいめいを惜おしみなく凡夫ぼんぷにおあたへくださることでもあります。

攝取せつしゆとは「おさめとつて」くださることである、即ち如來にょらいが凡夫ぼんぷの罪業ざいごふをのこすところなくひきうけてくださることでもあります。

如來にょらいは惜おしみなく與あたへ残のこすところなく続つべたまふ、こうしたおんはからひによつて如來にょらいが凡夫ぼんぷとひとつになりきつてくださるのであります。廻向えきやうは如來にょらいが凡夫ぼんぷのものとなつてくださること、攝取せつしゆは凡夫ぼんぷを如來にょらいのものとなしてくださること

とであります。

彌陀みだをたのめば南無阿彌陀佛なむあみだぶつの主ぬしになるなり、南無阿彌陀佛なむあみだぶつの主ぬしに成なるといふは信心しんじんをうることなり。(御一代記聞書)

これは廻向えきやうの信心しんじんをのべられたのであります、如來にょらいが凡夫ぼんぷのものになつてくださるのであります。

彌陀みだをたのめる人は南無阿彌陀佛なむあみだぶつに身みをまゐるめたる事ことなり。(御一代記聞書) これは攝取せつしゆの利益りやくをのべられたものであります、凡夫ぼんぷを如來にょらいのものに続つべてくださるのであります。

回向えきやうによつて内うちにいかす生命せいめいの糧かてとなり、攝取せつしゆによつて外ほかにまゐる哺ほみの手てとなりたまふ、内うちに生いかすも外ほかにまゐるも別べつなものではない、たゞ行届ゆきとどいた如來にょらいのおんはからひの至相しさうを味あじはふに外ほかなりません、かくて回向えきやうの法ほふたる南無阿

666
240

彌陀佛はそのまゝ、「おさめ、たすけ、すくふ」ところの攝取の法であります、かゝる法の至きおはからひを仰げば凡夫の手元に何等のはからひをさしはさむことも要しませぬ、たゞ兩手をはなして「おまかせ」するだけであります、「たすけたまへとたのむ」だけであります。

たのむこゝろといふは、即ち是、阿彌陀佛の衆生を八萬四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を衆生にあたへましますこゝろなり。(御文第四

帖第六通)

この御文は機法一體の原理に住して、攝取と回向との聖化のおはからひの互具することを示し、それによつて絶対依憑の信即ち「たのむこゝろ」の純熟することをのべられたものであります。

かくて上人は宗教の極致をあるがまゝに開顯してくだされたのであります。

ねてもさめてもまふすこと

「草の庵にねてもさめてもまうすこと、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」これは良寛の五合庵における法悦であります、わたくしはこの歌をくちさむとぎ、いつでも蓮如上人をおもひうかべるのであります、「ねてもさめても稱名念佛すべきものなり」といふのが上人の御文に、しばしくりかへされることばであります。南無阿彌陀佛をめぐまれてよみがへり、南無阿彌陀佛にまらぬられて生かされてゐられた上人は、ねてもさめても、お念佛をまふしてゐられたのであります、のんびりとくつろいでお念佛をまうされたお姿、身もこゝろも大慈の御手に任せきつて安らかに稱名せられたお姿、御文をいたゞいて「ねて

666
240

もさめても稱名念佛すべきものなり」のおことばをいたゞくとき、上人のお姿が髣髴としてしのばれます。

上人のお念佛はめぐみに生きるものゝうつくしい姿でありました、佛恩を感じ謝しておのづからお念佛まふされたのでありました。

救ひをもとめて祈るものゝ聲は切實なれども、そこには充たされないやるせない焦慮があります。稱へねば救はれないといふ律法に縛られたものゝ念佛は形式はとゝのふてゐるが、空虚な淋しさがあります。上人の念佛はこんな淋しいものでもなく、いらいらしたものではありません、救はれめぐまれて生かされる御恩をよろこぶ充たされたものであります、子供が母よ母よとよびながら慈愛を享けて生き伸びてゆくやうに、念佛は慈恩を感荷してゆくものゝよろこびのしらべであります。こゝにはじめて、純全な念佛三昧があらはれたのであ

ります、佛とひとつになるために念ずるのでない、佛とひとつになりきつたところ念ぜずに居れない念佛であります、こゝに如來とひとつになつて生きるものゝ法喜があるのであります。

蓮如上人はいかにも自然にお念佛もうされました、そしてお念佛をまうしてゐるといふこゝろもちよりも、お念佛まうさせてくださるのであると、よろこんでゐられたのであります。

口に稱ふるは我等が申す様には候へども、信にもよほされて彌陀より申させらるゝ念佛也、悉く他力にもよほされて申すなれば、皆他力より申させらるゝ稱名と心得べきなり。(一期記)

まことに素純な三昧の境地であります。これは謙つて生ける虔ましいこゝろにめぐまれた神秘感であります。

666
240

たしなむころも他力

信ずるは他力である、私が信じたのではない、御方便によつて信じさせていたのであります。稱へるは他力である、私が稱へてゐるのではない、御念力によつて稱へさせていたのであります。

信ずるのも稱へるのも救はれてゆく心行はすべて他力である、一切合財がおはからひにはからはれてゐるのである、上人はこうしたころもちで、素直に全きおめぐみを領納されたのであります。「なにもかもあなたまかせ」これほど素純な聖化の生活はありませぬ。

ところがこの他力の心行といふこと、「あなたまかせ」といふことを勘違ひし

て、なげやりの生活、なまけもの、天國のやうに、奇蹟をまちまうけてゐるものがあります。

うちすてゝおいてはよろこべない悲しい大地であります、わがまゝ氣まゝではうつくしく生き伸びられないあさましい凡夫であります、よろこばれない生活であればあるほど、すこしでもよろこばれるやうに氣をつけさせていたゞかねばなりません、あさましい凡夫であればあるほど、できうるだけはつゝしませていたゞかねばなりません、この氣をつけること、このつゝしむころを上人は「たしなみ」と仰せられました、そして、たしなみが大切であるといふのが上人の御持言でありました。

「たしなみ」とはもとは嗜き好むことであります、うつくしい趣味や、よいことを嗜き好むことであります、それが一轉して、下品なことや、わるいことを

ひかへつゝしむことを「たしなみ」と申すことになりました、つまり善いことに精進し悪いことを制御するころもちを「たしなみ」といふのであります。上人はいつも、この「たしなみ」といふことをくりかへして美しい徳を修得せられました、試みに御一代記聞書をひもとくと、いたるところにこれが示されてあります、その一二を抄録いたします。

一度のちかひが一期のちかひなり、一度のたしなみが一期のたしなみなり、そのまゝのちをばれば一期のちかひになるによりてなり。

佛法者の少しの違を見ては、あの方へさへかやうに候とおもひ、我身をふかくたしなむべきことなり。

人はそらごとを申さじとたしなむを随分とこそおもへ、心にいつはりあらじとたしなむ人はさのみ多くはなきものなり、又よきことはならぬまでも世間

佛法ともに心にかけて、たしなみたき事なり。

そして、上人ほど修道について深い工夫と用意をなされたお方はありません。

聞法、精進、反省、修徳、すべてにおいてころをくだかれました。しかも、

それらの「たしなみ」がそのまゝ如來のおはからひによることを内観して、「たしなむころも他力なり」と感ぜられたのであります、従つて、そこには律法めいた窮屈さはすこしもありません、もとよりさとりすますなどいふ厭味はありませんでした。

佛恩をたしなむこと、仰候事、世間の物をたしなむなどいふやうなることにてはなし。信のうへは、たうとく有難く存じよろこび申す透間に懈怠申す時、かゝる廣大の御恩をわすれ申すことのあさましさよと、佛智たちかへりて有難やたふとやと思へば御もよほしにより、念佛を申すなり。たしなむ

とはこれなる由の義に候。(御一代記聞書)

いかにも深められたころもちであり、浄められたよろこびであります。た
しなむところの工夫がそのまま、如来の御催促にあづかつてゐることを内観され
て、まる／＼他力にまゐらるゝられて法悦の生活を圓成されたのであります。

念 佛 三 昧

666

240

眞實の御名

七四

親鸞聖人は眞實は南無阿彌陀佛であると仰られました、このお言葉はたくさんの人々によつて繰返されてゐるものゝひとつであります、また、たくさんの人によつてそれが理解されてをると思はれてをる言葉であります。人のことはしばらく別として、自分自身の心持をいひましても、眞實が如來であり、南無阿彌陀佛であるといふことは、よくわかつたつもりでをる、わかつたつもりでをるのだが、わかつたつもりといふことは、よほど警戒しなければならぬことであつて、このひとつの言葉を靜かに味はうて見るといふと、よほどの深さをもつてをると思はれるといふのであります。いくらか學問といふやうな世界

に籍を置いてをるものになりますと、いろ／＼なことをやつてをりますが、結局は眞理を探してゐる、そして眞理といふても机の上で飾つておくやうな眞理でなくて、われ／＼がほんとうに生きてゆく魂になる眞理をほしがつてゐるそしてあれであらうか、これであらうかと擱んで見たり放して見たりする。これは學問の世界に居る人の話でありますが、行の世界にをられる人、近いところでは一燈園にをられるといふやうな人たち、懺悔もして見る、勤勞もして見る、奉仕もして見る、形はちがつてゐるがほんとうにわれ／＼を生かすものがどこにあるかといふことを求めてゐられるのだと思ひます。これは眼立つものについていふたのでありますが、人間は或る意味においてみな順禮者である、みな何かを求めてゐる、それを推しつめて見ると、皆が眞實を求めやうとしてをる、さういふときに、われ／＼の小さな經驗の上でかうであらうか、あゝで

七五

あらうかと考へて来て、どうもあれでもないやうだ、これでもないやうだといふ氣がする、さういふ迂餘曲折を親鸞聖人の言葉でいふと「信に迷ひ行に惑ふ」のであります、右に往き左に往き十字街頭にたつてさまよへる旅人の前に、眞實は如来である、眞實は南無阿彌陀佛であるといはれた親鸞聖人の言葉を靜かに受とると、眼の醒めるやうな感じがするのであります。そしてすでにわかつて居つたと思ふてをつたことが、ほんとうにわかつてをらないのであつて、この一つの言葉の中には萬人を靜かに考へさせる深いものが示されてある、かう感じられるのであります。

そこでそれを私はわれ／＼の平素お慕ひ申し尊敬してゐる方の上における生活をつりかへつて見たときに、如何にもその地上における眞實は念佛ひとつであるといふことがうなづけるやうな氣がするのであります。

先聖のみあと

法然上人がなくなられる時に、「昔からの聖者方がなくなられたあとには、みんなが追慕する一つの舊蹟が残つてゐる、あなたの御舊蹟としてどこを保存いたしませう」とおたづねしたときに、法然上人は「おれの菩提所なんかつくつてくれるな、わがあととは稱名のあるところ、すなはち、わがあとである、お念佛がとなへられるところ、そこがおれのあとである」斯ういふお答でありました。これに類した法然上人のお言葉を頂くと、枚擧に違ないほど出てゐるが、今の言葉が法然上人の最後の言葉のひとつだといふことに注意して見て、非常に貴いものであると思ふのであります。



一體われ／＼は眞實がお念佛だといふ言葉をいつてゐるが、どれだけそれがうなづけてゐるか、受け取れてゐるかといふことはよほど反省されなくてはならないのであります。

また、親鸞聖人もその通りであつて、歎異鈔の第二條を頂くと、どなたもよく知つてゐられるやうに「親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられぬならずべしとよきひとのおほせをかうむりて信ずるほかに別の仔細なきなり」これは親鸞聖人の御自督であつて、非常に明快なお言葉であります。

それから蓮如上人になりますと、實にわれ／＼に手近くそれが現はれて來てゐる。蓮如上人といふお方は念佛に對して素直な親しみをもつてゐられたお方でありませう。よくかういふことをいふ人がある、「親鸞聖人は念佛往生といふことをいはれたが、今の淨土眞宗の信仰は蓮如上人の拵へたもので、親鸞聖人の

教化と大分ちがふ」と、かういふ風に相當の學者が考へてゐるらしい、それから今でも行信論などで問題になつて來ると「お文さまではこのまゝで助けるといはれるのに、お聖人さまになるとお念佛申して救はれるのだと仰言つてあるどうも御教化が二つある」と、かういふ風にすらかんがへてゐるが、それはおそらく觀方が皮相である、筋が通つてをらないのだと考へられます。

蓮如上人と名號本尊

前述のとほり蓮如上人は名號本尊の復古者でありました。「他流には名號より繪像、繪像よりは木像といふなり、當流には木像よりは繪像、繪像よりは名號といふなり」といふのが蓮如上人の非常に卓拔な批判でありました。これは一

666
240

面からいふと蓮如上人が本尊に對する復古運動を行はれたのであります。

蓮如上人は實に物やはらかな、そして非常によくわけのわかつたお方です、門徒のものが来て、御說法してつかれるといふと踊を踊つて見せて御法義を説かれたといふ位であつて、それがやゝもすると蓮如上人はお上手がすぎる、そこにいや味があるなどと考へる人もあるのでありますが、それは決して魂のない如才なさではない、いはゆる敎家の手管と違ふのであつて、非常にはつきりしたものをもつてゐられるのであります、さういふものやはらかな、蓮如上人がさういふ手さびしい御本尊に對する復古運動を起された、御當流では木像よりは繪像、繪像よりは名號である、親鸞聖人が盡十方無碍光如來といふ御名號の前にひざまづかれたお心持をそのまま復活せられました。そこでこの南無阿彌陀佛といふ御名號に非常に親しみをもちました、また、蓮如上人のお言

葉のなかに「日本で自分ほど澤山の名號を書いたものは居るまい」といつてをられるのであります。今日見ましても蓮如上人のお筆のあとが非常にたくさん残つてゐる、それはいはゆる本尊の統一をはかれたのであります。殊に虎生の名號などいふのがありません、それは恐らく荒むしろの上に紙を伸べてお書きになつたからだと思ひますが、とにかく「日本で自分ほどたくさん名號を書いたものは居るまい」といつてをられる、さういふやうなところを見ましても蓮如上人はほんとうに南無阿彌陀佛といふ御名號に非常に深い親しみをもちてゐられたことがうかゞはれます。そして、さういふ大膽な本尊の復古運動を起された英邁な批判者でありながら、ほんとうに處女のごとき素直さをもつて、この尊いものを一點一劃でもまちがへては大變だといふので、名號を書かれるときには、お聖人さまの書かれた文字の通りに書かれたといふのであります。

こゝに上人の素直な態度と、床しい心持があると思ふ、眞理をうけつぐものには獅子のごとき勇敢さと、乙女のやうな素直さをかね具へてゐなければ、その資格がない。上人がこの名號本尊をほんとうに革命なされたといふことは大變な果斷なことでありませう。その位の勇敢にして徹底せる批判者でありながらこの貴い魂を、この貴い眞實なるものを、お聖人さまのおよろこびになつたまゝで喜ぶべきものであると念じて聖人の御流儀にかぎりてあそばしたのであります。そこでいつでも反省させられることなのですが、その眞實をあらはすのには、ほんとうに慎みぶかい心もちと、どんなものでもぶち破つてゆく勇氣それがうまく出て來なければ眞理に仕へる資格がない、われわれは、やさしうならねばならぬところで出しやばつて見たり、勇敢にならなければならぬところで腰ぬけになつたり、まことに申しわけのないことであるが、さういふこと

を注意することによつて日々反省させられてをる、闘ふや眞理のために闘ひ、順ふや眞理のために順ふ、これは目ざめたるお聖人の遺弟としてその芳躅を慕ふものゝ餘程注意をしなければならぬところであります。

生命の供養

さういふことで蓮如上人が非常にたくさん名號本尊をお書きになつたが、それは決して形式的な問題を取扱はれたのでなくて、御名號を書かれるまゝが人生に對する生命の供養でありました。「實悟記」には次のごとく記されてあります。

法印兼縁幼少の時、二俣にてあまた小名號を申入候とき、信心をやるぞく



と仰られ候、信心の體名號にて候仰いま思合候との義に候。

これを拜讀して坐るに生命の供養といふことを思ふのであります。御名號を與へて信心をやるぞとの仰せ、實にたふといことであります。年の暮に金に困つてゐるものに金をやるといふ位大きな施し物はないと考へるのは世間普通の考へ方でありませう。しかしながら奈落に落ちてゆく魂に、お浄土に生れる魂を供養することにはあまり驚きをもつてゐない。けれども名號を申し入れたとき、信心をやるぞといはれた蓮如上人ほど大きなものを施されたお方はない、地上の乏しきものに對して無限の大施主でありました。

また、蓮如上人はお念佛のなかに生きられた方であつて、御一代記開書に次の如く仰せられてあります、

丹後法眼衣装どのへられ前々住上人の御前に伺候さふらひし時、仰られ

候、衣の襟を御たゝきありて、南無阿彌陀佛よ、と仰られ候。又前々住

上人は御疊をたゝかれ、南無阿彌陀佛にもたれる由仰られ候き、南無阿彌

陀佛に身をばまるめたと仰られ候と符合申候。

斯ういふ記録を見ましても、上人がほんとうに身も心もお念佛のなかに安らかなよろこびをもつてゐられたといふことがわかるのであります。

他力の念佛

親鸞聖人は「南無阿彌陀佛」のみ名、それこそ地上に光るたつたひとつの眞實であるとして仰せられました、これを法然親鸞蓮如といふ聖者方の實際の生活の上によりかへつて見ると、いよゝ／＼榮として光りを放つてゐると思ふ。そこでこ



のお念佛を素直に喜ぶ人は非常に恵まれた人であり、ところが非常に注意しなければならぬことは、「神よ神よといふものが必ずしも天國に入らず」といつた聖者もありますが、お念佛を稱へてをるものが必ずしもお浄土に生れない、これは親鸞聖人の深く警戒されたところです。お念佛を稱へることなしにおちてゆく魂も、ほんとうに取返し出来ないことですから、もつと遺憾なことは、お念佛をとなへながら如來を裏切つてゆく、かういふことはよほど警戒しなければならぬ、さういふことをいはれて來ると、それぢやどう稱へたらいい、どう受け取つて來るか、さうなると餘ほど人間は窮屈になつてしまふて行詰りますが、さういふことを意味するのではない、如何やうに喜びませうかとお尋ねしたら法然上人は「凡夫の生れつきのまゝで申せ」と仰せられた如何にも明快であります。親鸞聖人は「義なきをもつて義とす」と仰せられた

凡夫の手垢をつけずに喜ぶといふことであります。名號は信仰の對象であるといふことは誰も知つてゐる、しかし信ずることが名號のあらはれであるといふことは多くの人に忘れられてゐる、南無阿彌陀佛は稱へられるものであるといふことは多くの人は知つてをる、南無阿彌陀佛はそのまゝが稱へ出されて來るのだといふことに氣がつかないかのやうであります。そこでこの南無阿彌陀佛を手垢をつけずに喜ばれた蓮如上人の心持を手短かに申しあげやうと思ふのであります。

生ける聖化

仰に、南無といふは歸命なり。歸命といふは彌陀を一念たのみまいらするこ

666
240

ころなり、また發願廻向といふは、たのむ機にやがて大善大功德をあたへたまふなり、その體すなはち阿彌陀佛なり、と仰せ候き。

これは御一代記聞書にのせてあります、何十回となく頂いた言葉なのであります、私はこの頃ことのほか、これを見て、何といふ貴いことだらうと思ふ、これを讀んでゐて、坐に生ける聖化といふことを感じます。聖化といふことは如來とひとつになるといふことです。如來が私とひとつになつて下さるんだといふことであります。名號は佛壇の中に固定してゐらせられる偶像でなくて、如何に逆謗闡提の輩なりとも、素直に信順させ手を合せてお念佛を稱へさせるまで生きてはたらいて來る力であるといふことを考へたときに、非常に貴いことであるとおもはれます。ほんとうにそこに兩手を放すといふ心持、自力のはからひを投げ棄、といふ心もちが自然に會得されるやうな氣がして、この簡

單な蓮如上人のお言葉を近時は殊のほか深く味はつてをるのであります。

このお言葉は善導大師の六字釋のお心を喜ばれたものであります。善導大師といふお方は、凡夫がお淨土に生れる道がお念佛を申すひとつであるといふことを非常にはつきりお示し下されたお方でありました。凡そその南無阿彌陀佛の六字に解釋を加へられたのが、善導大師であつて、ほとんど淨土教における典型的な解釋であります。そしてそれ以外の解釋は誰れもしてをりません。これは生命に仕へるもの、謙讓さであります。この淨土教で善導大師の六字釋以外に、南無阿彌陀佛に對する新しき解釋を誰れも試みてゐないのは、それは獨創力がないのでもなければ味ふてをらないのでもない、この貴い生命の前に人間が最少限度の言葉しか使ふてをらないのです、やむを得ざる説明以外に説明を加へることを恐れたのです、かゝる謙讓な淨土教の聖者たちの態度はいかにも

666
240

666
240

床ゆかしいものと申まうさねばなりませぬ、親鸞しんらん聖人しやうにんにしてもその通りとほであります。蓮れん如上人にょしやうにんにしてもその通りとほであります。この善導ぜんたう大師たいしの六字釋じくし以外いざいに出てをらな
い勿論もちろん善導ぜんたう大師たいしの六字釋じくしの上に示しめされてをること、それが法然上人ほふねんしやうにん、親鸞聖人しんらんしやうにん
蓮如上人れんにょしやうにんの上うへにあらはれて来て、白しろき花はなには白しろき光ひかりあり、赤あかき花はなには赤あかき光ひかり
ありで、おのゝ美しい色彩しきさいをあらはして来てをるといふことはいふまでもな
いが、決して善導ぜんたうの上うへにあたらしきものを加くわへてをられないところに非常ひじょうな妙
味みがあります。

そこになると、結局けつぎは、なんぼ學問がくもんして見ても學問がくもんでは救すくはれないのです、
ほんとうにしつくりするのは素直すなはにお念佛ねんぶつするときであります、たゞお念佛ねんぶつを
よろこぶのが一番純粹ばんじゆんずいであります。解釋げしぎを入れて見れば見るほどいけない、さ
うなると「伊達だてといふ伊達だてしつくりして紙衣かみしかな」といふ垢ぬけのした世界せかいがあ

る、ほんとうに「淨土宗じゆつとしゆは愚者ぐしやになりて信しんずるなり」と智慧ちゑ第一だいいちの法然房ほふねんぼうがあ
らゆるものをすて、愚者ぐしやにかへられたところが何なんともいはれない眞理しんりをつぐも
の、叡智えいちのひらめきです。美しい智慧ちゑがひらめいてゐる。とりわけて蓮如上人れんにょしやうにん
はこの善導ぜんたう大師たいしの六字釋じくしを尊そん重ちゆうされました、八十通つうのお文ふみをよむと、言南無者ごんなんむしや
の釋しきがいくたびもいくたびも引ひいてある、面白おもしろいことには何時いつも同じお説教せつけうを
なさるので、われゝのやうなものがやると、あゝまたあの話はなしか、あれは何なん
べんも聞いたといつて向むかふを向むかいてしまふのであります、「法敬坊ほふきやうぼう、九十まで
存命ぞんめいさふらふ。このとしまで聽聞あききまふしさふらへども、これまでと存知ぞんちたるこ
となし、あきたりもなきことなり、とまふされさふらう。」いつもかも同じこと
を繰返くりかへしてゐられた蓮如上人れんにょしやうにんも貴たかいが、それを聞いていつも新しき驚おどろきと感激かんげき
をもつて聞いてゐた法敬坊順誓ほふきやうぼうじゆんせいといふ人も非常ひじょうに貴たかい方かたでありました。

名號の釋義

さてその「言南無者の釋」といふは、善導大師が南無阿彌陀佛を解釋されて玄義分に「南無の言は即是歸命である、亦是發願廻向の義である、そして阿彌陀佛は即是其行である」と申された御釋です、この歸命と發願廻向と即是其行を六字釋の三義といふのであります。これはつまり、南無阿彌陀佛は唯願無行でない、願行具足である、全一の生命であること、願もあり行もあるといふことを示されたのであります、即ち南無阿彌陀佛のなかには、われわれがお浄土に生れる資糧がすつかり揃うてゐる。信、願、行といふ成佛の三資糧が揃ふてゐると顯開されたのが、善導大師の御釋であります。

蓮如上人はこの善導大師の解釋をほりさげてゐられました。そして、そのほりさげ方は親鸞聖人のほりさげ方をうけつがれたのであります。

南無といふは歸命なり、歸命といふは彌陀をたのみ一念、たのみまゐらす心なり。

まづ、南無といふは歸命、歸命といふは「たのみ」ことである。「たのみ」といふことは「おまかせ」をするといふことであります。佛さまにおまかせするのが信心であります。

つぎに、發願廻向とはどういふことか、本來はわれわれがお浄土に行く發願廻向であります。發願といふことは御浄土に行きたいといふねがひ、廻向といふことは品物をもつてゆくことです、そこで發願廻向はお浄土を求めてゆく行者の心もちであるが、それを深めて「頼むわれにやがて大善大功德を與へたま



ふ心なり」とのべて、佛が私に功德善根のありだけを施して下さることであるとまうされました。

最後に、施してくださいさる物體は如來の全生命である、「即ちその體は阿彌陀佛なり」とあるはこの意味であります、如來はその全生命を惜みなくわれわれに與へて下さるのであります。

これをまとめると次のごとくであります。

即是歸命（信受心）

發願廻向（施與心）

即是其行（廻施物）

この釋についてはいくつか味はふべき點がありますが、少くともふたつの妙趣があると思はれます。

施心と施物の一致

第一は施心と施物の一致であります。如來が私を救ふのは外部的に救ふのでなくて、如來がその全てを施して私を生かすことです。施してくださいさるものは何であるかといふと南無阿彌陀佛であります。南無阿彌陀佛は佛の正覺の嘉號である、その如來の内證も外用も、如來の全體のおさとりがそのまゝ衆生の救ひの力として與へものとして成就されてあるのであります、而して與へられるものですが、そのまゝ與へやうとする心となるのであります。南無阿彌陀佛の全體が與へやうとする心即ち施心であり、南無阿彌陀佛の全體が與へる物柄即ち施物であります。地上では施物と施心とが二つある、ところが、名號にお

666
240

いてはこの二つがひとつであります、こゝではじめて愛は惜みなく與へるといふ意味が成立する。さて南無阿彌陀佛はわれに與へて下さるものから即ち施物であるといふことは多くの人の氣がつくことですけれども、それが與へるこゝろ即ち施心であることが仰がれないのです。お内佛の名號を拜んで居つて、施物といふことは仰がれるが、そのまゝ與へる心即ち施心であるといふことが一寸見忘れられる、それを見忘れてをるからこちらの方から探さうとしてをる。名號を擲まう擲まうとしてをる、名號の施物そのまゝ與へようといふ施心があることを見失ふてをるから擲まう擲まうとしてをる、こゝに施心と施物の一致といふことは非常にありがたいことです。與へるものと與へる心、與へる心の全體が與へるもの、南無阿彌陀佛は何かといふと私に與へて下さる如來の全生命である、そのまゝが私に與へんとする如來の願心である、そこでその南無阿

彌陀佛といふ嘉號はいかにもわれわれに親しみの深いものになつて來るのであります、愛は惜みなく與へるといひますが、ほんとうに惜みなく與へるものがあればそれは阿彌陀如來だけであります。

多くのものは、なんぼ他人を愛して居つても自分自身を生かしたあまりものを與へるか、若くは自分自身を愛することになる程度において與へてゐる、さらに穿つて云ひますと與へることによつて奪はうとしてをる、そこになるとほんとうにお念佛のみが、眞實の大施であります。かくおもふとき、如來の名號をいたゞくものは静かなお慈悲の讚嘆だけでなしに、動けるお慈悲を仰信なければならぬのであります。向ふに對象になつてをる佛様のお慈悲だけでなしに、かのお慈悲がこの私に働きかけて下さるといふことを感佩しなくてはなりません。



施與と信受との互具

如來は與へて下さる、われらは信ずるひとつである、眞受けにするひとつである。ところが素直にうけとる心が出て來ない。信ぜんとして信じ得ず、これは恐らく眞宗の信者の最後になつてゆきつまる淋しさのひとつでせう。おまかせする一つ、受けとる一つが出て來ない。この問題がいゆる「信にまどひ行にまよひ」と親鸞聖人の仰言つた點であります、これは何人も經驗した淋しさです。これについて第二に施與の心と信受の心との互具を示されました。南無といふのは歸命であり、また發願廻向である、その歸命は信受のころ、發願廻向は施與のころであります。如來の施與の心がわれらにあらはれて信受

の心となつて下さる、與へる心が受け取る心になつて下さる、實に意味の深いことであり、そこで初めて他力廻向の信といふことがわかる、與へやうとする心が徹底したところに受けとる心が出て來る、受けとる心は汝が用意せよといふ程度の與へ方は、いまだ施心の徹底せざるものである、與へる心のほかに受けとる心がない、與へる心が受け取る心になつて來る、一つの南無が與へる心で受けとる心、受けとる心で與へる心、といふ意味は、受け取る心になつて與へるので、母親が子供に菓子を與へますとき、子供に頂戴しなさいとおしへて與へます、これは實に美しい仕方です。ところが、そんな窮屈なことをいはなくても好い、頂戴しなければやらぬなどといふことはない、そんな心を親はもつてをりません、懷にある金を持つて行つても笑ふてをるところに親馬鹿があるにもかゝはらず、手を合せなさいとか頂戴しなさいとかいふことは味

666
240

ふべきことです、それは窮屈であるなど、批議してはならないのです、窮屈でもそれは愛の徹底です。與へるものを盗んで手の中に掴んでも見失ふてしまふてをる、親のくれる菓子でも掴んで逃げては、菓子の形は掴んでも菓子の本質は見失ふてをる、頂いて見て、はじめて與へようとする心もちが、愛の全體がしみとくと受け取れる、受け取る方法を教へてゐる、律法ではない、律法だと思ふたら大きに間違ふ、頂く手も與へようとするところの母の愛の徹底である、こゝに妙味がある、それを受け取るぢやの、となへなさいぢやのといはれると、どうもおかしなことぢやないかといふ疑問を投げる人がある、他力が自力になるんでないかと考へる人があるが、それは實は徹底せざる觀方であります。そんな窮屈なことでない、こゝではじめて受けとるのも、となへるのも全く南無阿彌陀佛のひとりばたらきである、かういふことが非常にはつきり感

佩されて來るのであります。

純全なる他力

與へるものがらと與へる心とが、南無阿彌陀佛である。與へる心の南無阿彌陀佛が、受けとる心の南無阿彌陀佛になる。かうなると私の手細工を入れる餘地が一點一劃もない、まるく他力である、こゝに「たゞ念佛して彌陀に助けられまゐらすべしとよきひとの仰を蒙りて信ずるほかに別の仔細なきなり」といはれた親鸞聖人のお心もちがいたゞかれます、凡夫の手垢をつけずにお念佛を頂くとところに非常にありがたいところがあります。

要するにわれわれがお念佛を稱へやうとする心持、救ひを求めやうとする心



666
240

彌生の蓮如忌

持、それは極めて眞面目な心もちであるにかゝはらず、求めやうとすればいよ
いよ如來から遠ざかる、擱まうとすれば却て如來から遠ざかるといふ皮肉が出
てくるのも、與へて下さるお念佛の性質がわからないから如實修行が出来ない
のです、お念佛の性質がはつきり分つたら祈るかはりに感謝するのである、求
めるかはりに受け取るのである、はからふかはりに任せるのである、おのづか
ら如實修行がはつきり出て來るのであつて、貴いお念佛をわれわれの手垢をつ
けずに喜んでゆくといふことは大變にありがたいことであると味はねばなりま
せぬ。

一〇四
愚老すでに當年は八十四歳まで存命せしむる條、不思議なり、まことに當流法義にも、あひかなふ歟のあひだ、本望のいたり、これにすぐべからざるもの歟。しかれば、愚老、當年の夏ころより違例せしめて、いまにおひて本復のすがたこれなし、つゝには當年寒中には、かならず往生の本懐をとぐべき條、一定とおもひはんべり。まことに宿善まかせとはいひながら、述懐のこゝろはしばらくもやむことなし。

これは大阪の坊舎において明應七年の霜月の御正忌にもされた最後の御文の一節であります。健氣な蓮如上人も、大阪の坊舎を建立なされてから、病みつかれました。明應六年の夏からおわるくなられ、その後、いくらか小康もあつたが七年の夏から薬餌に親しまれることゝなりました。「愚老、當年の夏ころより違例せしめて、いまにおひて本復のすがたこれなし」とはそれをのべられ

たのであります、とても、この冬は越されないと上人みづからも感ぜられ、それにつけても、門徒の人々の信心をいたゞくやうに念ぜられたのであります、功なり名とげられた上人としては、何も氣にかゝることはない、たゞ門徒の信心だけが氣にかゝるのであります。

上人の病氣を案じながら、それでも事なく、年はあらたまつて、明應八年になりました。

もと大阪の坊舎は上人が御隠居所として造営なされたもので、心潜かに墳墓の地とも期してゐられたのであります、そこでいよゝ再び起つことができな

いと思召された二月には、大阪に「御葬所」の用意もあらせられたのであります。

しかるに、二月十八日俄に山科の御本寺へおかへりになつたのですが、上人

のおこゝろもちは、はつきり窺はれます、御開山聖人のお膝元にて往生の素懐をとげんとなされたのに外なりませぬ。御重態のなかであるので、道中はおしづかに、大阪から山科へ三日かゝつて二十日におかへりになりました。

二十日に山科へおかへりになる否や、嗣法の實如上人に對して「一流の安心の次第の肝要は御文にくわしくのべておいたから、今は安心のことも、そんなに云ひ紛らすものもあるまいとおもはれる、このことを篤と分別して門徒へも傳へられたい、これが遺言であるぞ」と仰せられました。

二十一日には御眞影のまへに御參拜なされて、「今生ではとても御目にかゝれまいとおもひましたが、それでもこうして御目にかゝれました、何とまうしてよいか、ほんとうにありがたいこととござります」と、まのあたり生ける聖人に申上げるやうに、仰せられました。

二十三日には御往生なさる御所を御手くばりさせられました。

二十五日、周圍の土居を御覽になり、それから田興に召されて堀の上をあらこちらと御巡覽になりました、伊勢の宿の土居で御やすみになつて湯を召しあがられました、たま〜、お弟子の空善が新しい茶碗を用意してゐたので茶をたて、さしあげると「大變爽かな氣分になつた」とおよろこびなさいました。

二十七日には、ふたゝび御影堂へ御參りなまつてそのお歸りがけのとき、「門徒の人々に名残おしい」と仰せられ、田興を後向にかゝせて、群參の門徒の方をしみ〜ながめながら御わかれました。

かゝるうちに、二月もすんで、三月になりました、あたりは春めいてきました。三月の朔日には北殿へ御出ましになつて、御子息達と御同座で御きげんよく、御くつろぎなされて、いろ〜と御雑談なさいました。折柄、城菊檢校も



伺候して、いろ／＼と趣ふかいことを申し上げました。

これをしづかに微笑んできいてゐられた上人は、やがて、居ならば御子息方を御見まわしなされて、「みんな一念の信心をよく／＼いたゞいてお呉れ、これよりほかに遺言はないほどに」と仰せられました。

二日には「花がみたい、空善に申しつけよ」と仰せであるので、空善は盡力して三日には、吉野から櫻を切つてまゐり、それを北のお庭に植つけて御覽に入れると、三首の御詠歌あらせられました。

さきつゞく花みるたびに猶もまたたゞぬがはしき西の彼岸

老樂のいつまでもかくは病ぬらん迎へたまへや彌陀の浄土へ

今までは八十五にあまる身の久くいきしとしれやみな人

この日は御氣分もよくゐらせられたので、うら若いお子達にうたはせられて

おもての御座敷にお出ましになつて、お心をなぐさめられました。

七日の曉、自分で御脈をおとりになつて、「調子がちがふ」と仰せられ、醫者の藤左衛門をおよびになると、「胃のためにお脈がわるいのである」と診察しました。

それでも、この日は、御眞影へお暇乞にまゐりたいとて、御行水をなされ御衣裳をあらためられ、田輿に召されて阿彌陀堂へまうで、それから御影堂にまうでなされた。「今生の御暇乞にまゐりました、きつと極樂でお目にかゝります」と御眞影におわかれをなさるのでありました、集まつてゐた人々はみんな涙にくれました。

九日、御座を御亭へうつし、そこへお出ましになつて、法敬と空善と加賀の了珍を召され「さぞ、わが姿がみたからう。」「わが聲もきいて覚えておけ」と



仰せられて、しみじみと名残を惜しまれました。

また「空善のくれた鶯の聲を慰んだ、このうぐひすは法をきけよともなく鳥さへ法をきけとなくに、ましてや人間であつて、殊に聖人のお弟子であつて法をきかないでは淺間しいぞ」と仰せられた。

また、慶聞坊に「なにかよんできかせ」と仰せられるので、御堂御建立の御文を次第に三通よんでおきかせすると、「自分のつくつたものながら、殊勝や殊勝や」と仰せられました。

また、御臨終めさるべき、御枕一間のをし板に、開山聖人の御影をかけさせて、御自身は頭北面西に御臥床なされました。

また御自愛の栗の毛の馬がみたいと仰せられるので、四間の中、疊二疊をあけて、御床ちかく馬をつれてきて御覽に入れた。

この馬も感じたものとみえて、前脚をすこしのばし、涙をながし、首をたれて、尾をふることもしなかつた。

馬をひきかへすと、いとしづかに御椽の板をふんでかへつてゆくのでありました。

十七日の曉、御枕頭にて實如上人はじめ御子息の兄弟たちが打ちそろふて四返かへしの御念佛、和讃三首をおつとめになりました。

十八日に「我なきあとは、いよゝゝ氣をつけて、兄弟たちは仲よくゝらせ、その上、信心一味なれば仲もよくて御一流も繁昌するぞよ」とくりかくして仰せられました。

十九日から、重湯もおくすりも召上がらないで、たゞ念佛ばかり申され「はやくまわらせていたゞきたい」と念ぜられました。



666
240

二十二日、容貌がすこしかはりかけて、「すつかり御開山のやうな御相好に似させられた」と、御子達やお弟子達は申されるほどでありました。

二十三日より、御脈がよくなつたり、わるくなつたりしました。

二十四日のあかつきから、御往生も近いとおもはれる御容體であるので、法敬房は右の御手をいたゞき、空善房は兩の御足をいたゞいて、二人とも心もくれ目もくれて、たゞ落涙するばかりでありました。

二十五日の午、いかにも御しづかに、御ねむりなさるやうに、御往生なされました。

いかにも、物靜かな御往生でありました。二月二十日から三月二十五日までこの一ヶ月あまりの御容體はつぶさに病床に侍つた空善の手記にしるされてあります。

いかにも、しみじみと人生の情趣を味ひつくし、しづかに淨土をあこがれて物しづかに、終られました。

思ひのこすこともなく、すべてを圓かに成就し、全力をさへげて一生涯聖い奉仕をなしたつくされた人のみにあらはるゝ、めぐまれた最後のお姿でありました。熟しきつた果實がしづかに大地にかへるやうに、太陽が悔ゆることなく海の底にかくれたるやうに、まどかな御往生をとげさせられました。

さくらの花さく頃、うぐひすのなく頃、春の自然はわが蓮如上人の御往生をかざるにふさはしいものであります。

蓮如上人は「春の聖者」であらせられました。

昭和五年四月十九日印刷
 昭和五年四月十四日發行
 昭和十年四月一日三版發行

定價金五拾錢
 (郵稅四錢)

不許複製

著者
 發行者
 印刷者
 發行所

京都市高臺寺榭屋町三六二
 梅原眞隆
 京都市上京區賀茂板倉町六一
 玉置賴晃
 京都市下京區櫛笥通五條南
 定池由太郎
 京都市上京區賀茂板倉町六一
 顯眞學苑出版部
 電話 西陣四六六六
 東區口區大坂六七五三

天進社印刷所印刷

發賣所

明治書院

東京市神田區錦町一丁目十番地

振替口座東京四九九一番

顯眞學苑研究叢書

萬千穗敬乘	玉置賴晃	印度の大乗經典	・五〇四
寺本慧蓮	梅原眞隆	覺如上人の傳統	・五〇四
大原性實	梅原眞隆	淨土教の中心問題	・五〇四
辻本鐵夫	梅原眞隆	經集概說	・五〇四
梅原眞隆	梅原眞隆	歎異鈔概說	・七〇四
佐伯祐正	岡道因	宗教と社會事業	・五〇四
蘭田香勳	玉置賴晃	ニ一チエと佛教	・五〇四
梅原眞隆	藤枝昌道	親鸞聖人の三經觀	・三〇二
聖覺法印の研究	眞鍋廣濟	地藏説話の研究	・七〇四
眞宗相承の系譜	梅原眞隆	眞宗相承の系譜	・四〇四
大原性實	小谷徳水	佛青組織論	・五〇四
松井了穩	澁川敬應	合掌の研究	・八〇四
梅原眞隆	玉置賴晃	苦提心論	・三〇四
服部教授	關哲雄	國家の倫理形態	・五〇四
蓮如上人の行化と教義			・五〇四

666
 240

666
240

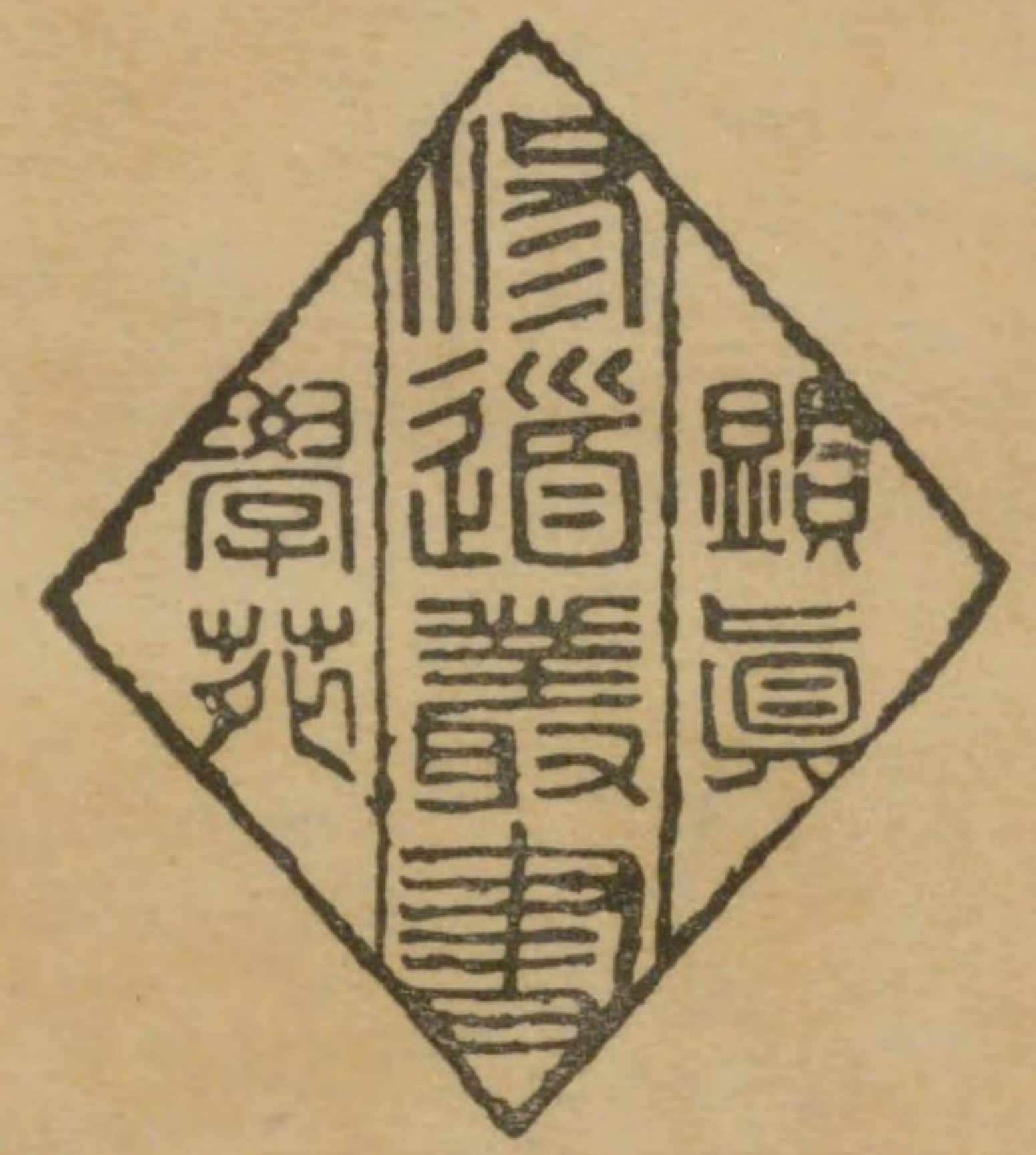
顯眞苑學道叢書

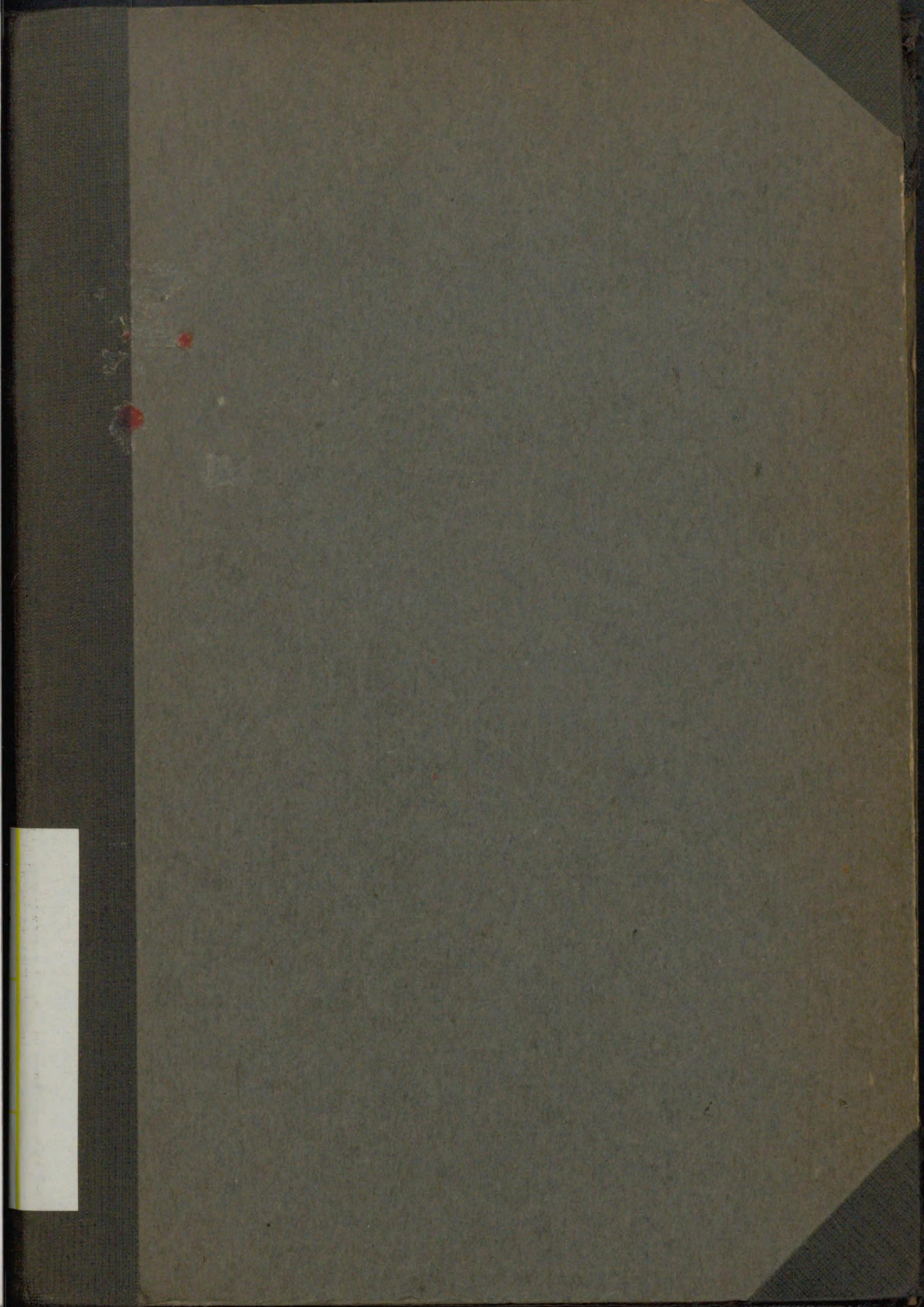
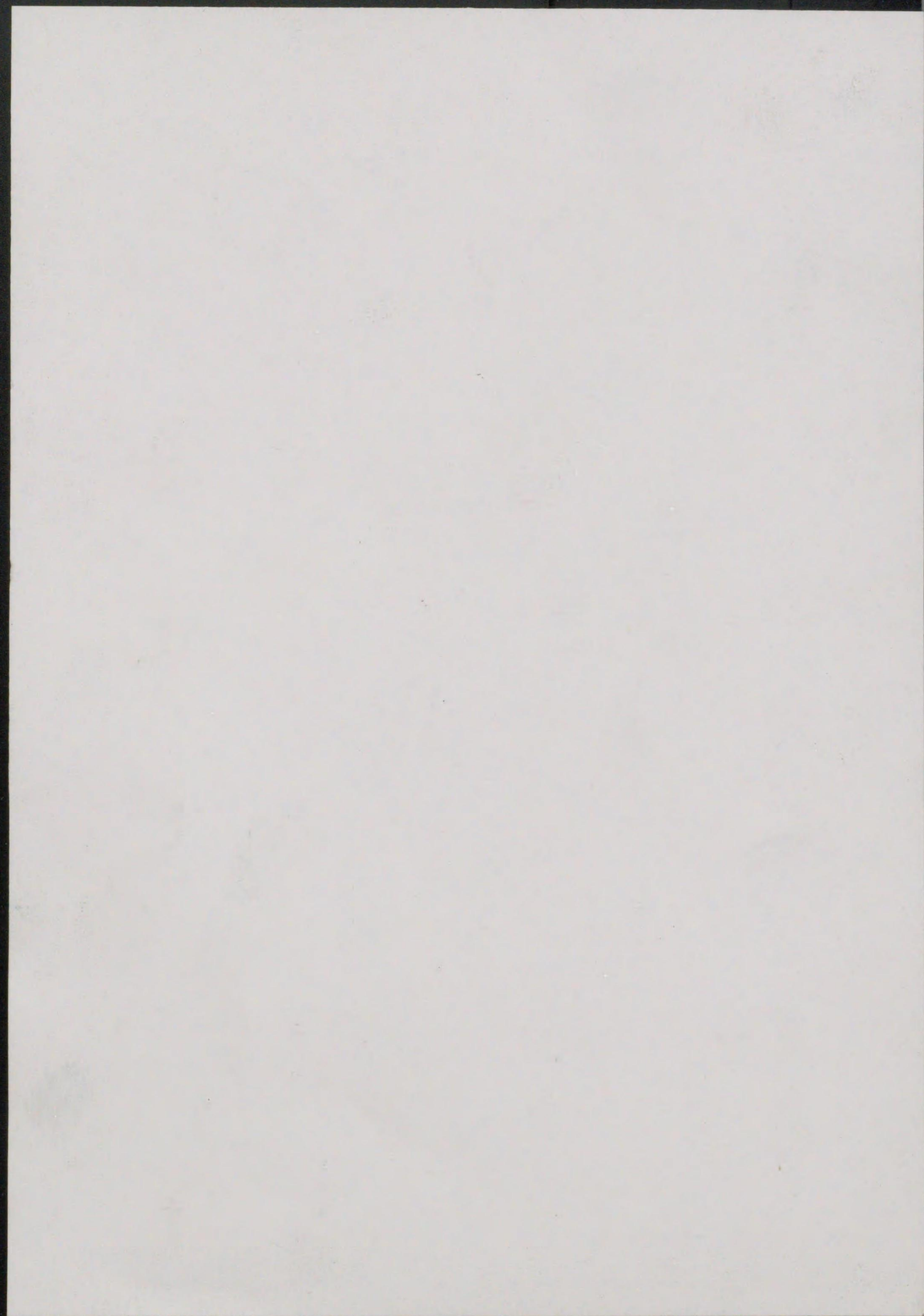
梅原 眞隆	蓮 如 上 人	・五〇	四
大原 性實	白 道	・五〇	四
高千穂 徹乘	法 然 上 人	・五〇	四
梅原 眞隆	晩年の親鸞聖人	・五〇	四
玉置 頼晃	般若心經講話	・六〇	四
高千穂 徹乘	信仰と生活	・四〇	四
佐々木 憲徳	佛教の精華	・五〇	四
佐々木 憲徳	佛教の精華續篇	・五〇	四
竹田 豊隆	修道生活	・五〇	四
津本 鐵城	道味小品	・五〇	四
大原 性實	讀佛偈講話	・五〇	四
荻生 隆三	愚禿禮讚	・五〇	四
玉置 頼晃	孟蘭盆經講話	・六〇	四
梅原 眞隆	大經五惡段講話	・四〇	二
高千穂 徹乘	大經重誓偈講話	・五〇	四
北島 治夫	無碍道	・五〇	四
玉置 頼晃	散華樂	・五〇	四
朝日 融溪	道を求めて	・五〇	四
板敷 晃純	東關の聖跡	・五〇	四
大原 性實	十二禮講話	・五〇	四
學苑 同人	聖徳太子憲章講讚	・五〇	四
熱田 靈知	六字釋講話	・五〇	四
學苑 同人	眞宗と越前	・五〇	四

666
240

Table with 10 columns and 15 rows, containing faint, illegible text.

666
240



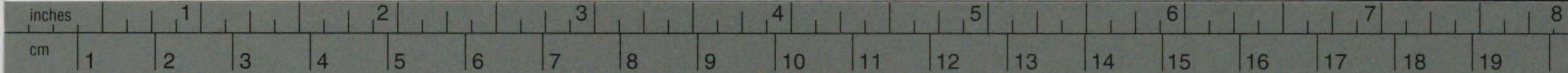


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

